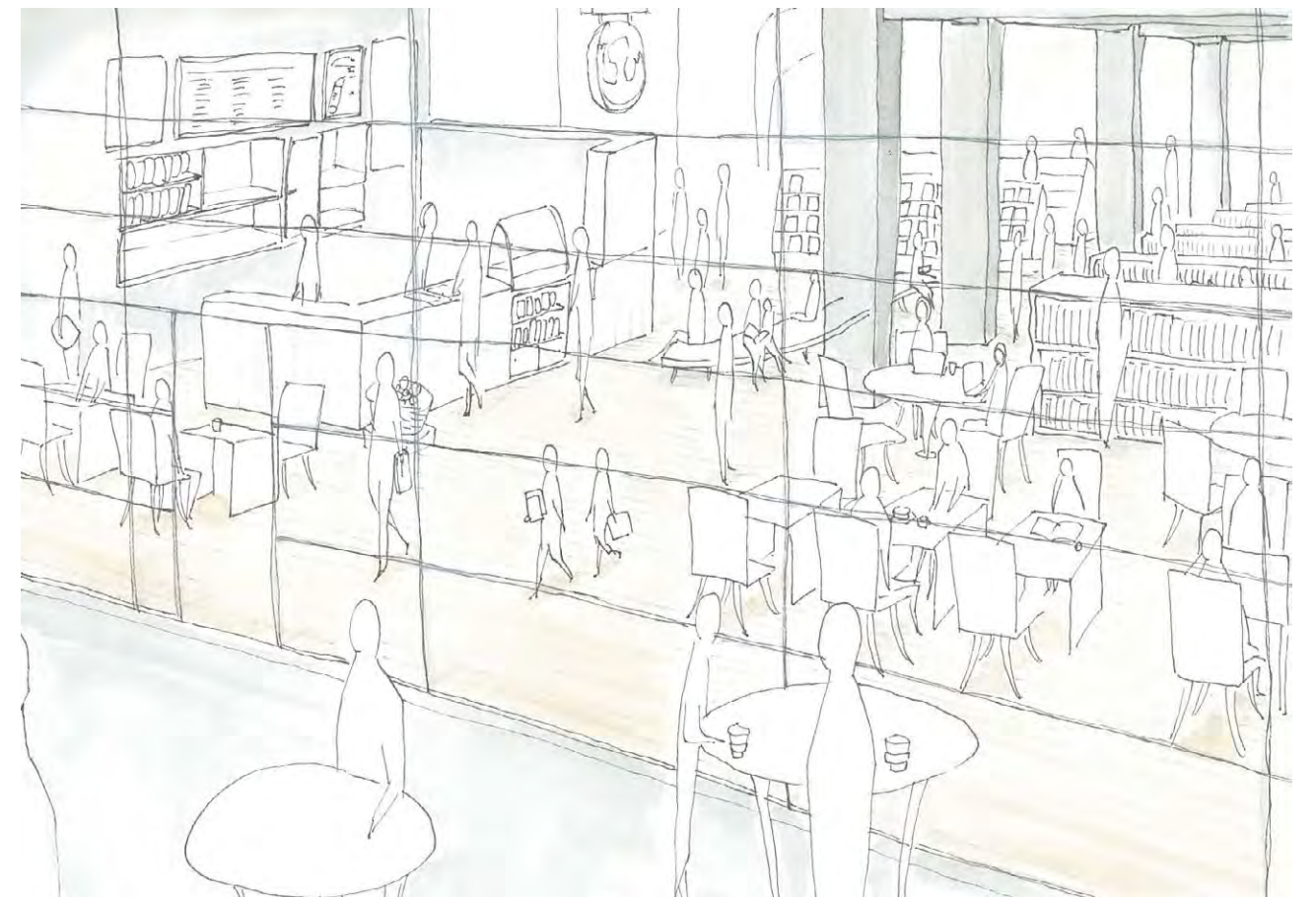


伊賀市南庁舎 [旧上野市庁舎] 再生計画
do.co.mo.mo_japan

2016.8.12



はじめに

日本では急速な高齢化が進みつつあるとともに、経済が停滞し税収が落ち込み、税金の無駄使いに対して、市民の厳しい目が向けられている。これまで公共施設は使いにくくなった、古くなったという理由により、多くが建て替えられてきたが、果たしてこの既定路線は正しかったのだろうか。現況の施設を活用し再利用すれば新築に比べ明らかに工事費の削減に繋がるばかりか、維持管理費や市民の利用料等を圧縮することも可能である。しかし、残念ながらその先例が日本では少なく周知されていない。今回、現庁舎を建替えて新しく賑わい施設を新築しても、50年後に「老朽化」と言って、また建て替えるのだろうか？欧米では百年、二百年、建築を使い続け、その建物が時を経た味わいをを放ち、美しいまちなみの一つを構成してきた。伊賀のまち、否、日本のまちも戦前まで、基本は欧米とほぼ同じ状況であった。伊賀では高度成長期まで百年、二百年使い続けられた民家が城下町の町割りに多数建ち並び、みごとな景観があったと言われるが、今ではその一部のまちなみに残っているだけである。そして例えば、日本の市民会館の多くが「老朽化」を理由に耐え替えられた。その市民会館は、利便性が向上したのかもしれないが、面積が肥大化し維持費も高騰、そのため利用料も値上がりし、その点では市民にとって使いにくい施設になってしまっている。これからの公共施設は、改修による機能の向上を図りながら、低成長時代に相応しい適切な規模で運営し、市民の共通の記憶のひとつとして末永く親しまれ使い続けられる建築となることを目指すべきである。

日本では、欧米に比べ建築の寿命が短く 20 年から 50 年で建て替えられている。欧米では建築や都市環境は時と共に更新するのではなく醸成されていくべきものであると考えられ、まちの住環境やその景観を形成している建築物が大切な市民の財産＝公益（公共の福祉）として認められ、保全されている。他方、日本では住みやすかったまちに中高層建築が建ち道路が拡幅され、住み続けられなくなり転居を強いられた市民も多い。住環境はその地に住み続けるための基本的な権利の一つであるが、日本では個人の財産権が優先しているため、居心地の良い住環境はますます失われつつある。欧米のランドマークとなってきた建築は、文化財として指定されて次世代にその住環境とともに継承されている。この伊賀市南庁舎は、JIA25 年賞で「旧上野市役所をはじめとする五つの公共建築で成る建築群」として高く評価されているように、伊賀城の山裾に広がる伊賀の旧城下町の住環境に配慮し、市民を見下ろすような中層のタワー型の建築群でなく、低層で伊賀の住環境に配慮した建築群として計画された。そして、旧上野市時代から、旧城下町と城山の間に控えめに建ちながら地域の象徴の一つとして市民に長年利用されてきた建築であるとともに、世界遺産となったル・コルビュジエの思想を受け継いだ坂倉準三の設計による建築的な価値の高い作品である。

今ではなかなか再現の難しい価値ある現庁舎を改修し、新築と同様に使い続けることが可能であることを多くの方々に理解いただけるよう再生計画をとりまとめた。そして、新築と改修を比較した際に、歴史的な建築を使い続けることの方が、伊賀のまちの魅力を増すことが可能であり、まちの賑わいに貢献できることを御理解いただければ幸甚である。

伊賀市南庁舎〔旧上野市庁舎〕再生計画について

この報告書は、伊賀市の賑わい創出検討協議会が平成 28 年 3 月にとりまとめた「伊賀市の賑わい創出グランドデザイン」で主案〔旧三重県上野総合庁舎の位置に 3 層の図書館を主とした複合施設を新築する〕と副案〔現伊賀市南庁舎を改修し図書館を主とした複合施設に再生する〕の 2 案が示された中で、副案の具体的な可能性についてとりまとめたものである。DOCOMOMO Japan の中に「伊賀市南庁舎（旧上野市庁舎）再生検討WG」を組織し作成した。

DOCOMOMO Japan 伊賀市南庁舎（旧上野市庁舎）再生検討WG

鰺坂 徹 鹿児島大学教授

今川 憲英 東京電機大学教授 TIS & PARTNER 代表

松隈 洋 京都工芸繊維大学教授 DOCOMOMO Japan 代表

渡邊 研司 東海大学教授 DOCOMOMO Japan 幹事長

平井 充 工学院大学非常勤講師 実践女子大学非常勤講師 株式会社メグロ建築研究所代表

アドバイザー

好川 忠延 元坂倉準三建築研究所OB 庁舎新築時の設計担当者

なお、具体的な設計図書作成・模型制作、構造検討は以下が担当した。検討に際して諸官庁との調整は未了のため、基本計画、基本設計、実施設計の際には、現地調査・確認の上、進めることが必要である。

建築計画 鹿児島大学校工学部建築学科鰺坂研究室＋鹿児島大学大学院建築学専攻及び工学部建築学科有志

鰺坂徹（教授） 増留麻紀子（助教） 西山知宏（チーフ M1） 中武昌平（OB） 佐久間勇輝（M2）

木村明寛（M2） 亀田翔（M2） 深谷春香（M1） 森永涼平（M1） 有留麻衣（M1） 佐々木麻結（B4）

北之園裕子（B4） 倉岡進吾（B4） 松田寛敬（B4） 本山翔伍（B4）

以下学生有志

M2：朝木聡一郎 濱地加奈

M1：倉原拡大

B4：金子祐士 中原健

B3：田村健太郎 池上功祐

B2：作取徹 瀬戸まりな 徳田優志 原端穂 田畑貴士 柴田隆詠 藤瀬雄登 安長留人 福留幹太
表紙スケッチ・P8 スケッチは佐々木麻結

構造計画 TIS & PARTNER

今川憲英（教授・TIS & PARTNER^o 代表） 今川聖英

伊賀上野のまちと庁舎の敷地

織田信長が伊賀に大軍を差し向け、この「天正伊賀の乱」により、伊賀は旧来の勢力から秀吉の命により筒井定次が大和郡山から伊賀上野に二十万石で入封し、伊賀城の築城とその足元に城下町が形成されていった。関ヶ原の合戦の後、家康の信任厚い藤堂高虎が、伊賀十萬石、伊勢、伊予の合計二十二万石の大名として入封した。藤堂高虎は、高さ十五間（約 30 m）の高石垣と五層の天守を築造するが、天守は完成目前に暴風雨で倒壊してしまった。また、藤堂家は、伊勢国の津を本拠としたため、1615 年の一国一城令により上野城は残念ながら再建されることはなく、明治維新を迎えた。

他方、古来より伊賀の上野は京都・奈良・伊勢を結ぶ街道がある交通の要衝として栄え、京・大和文化の影響を受けながらも独自の文化を醸成してきた。特に、松尾芭蕉や横光利一のふるさと、また、吉田兼好ゆかりの地としても知られている。なお、現在の市庁舎、上野高校、西小学校の敷地は、外堀の内側の城郭内にあり、「扇の芝」とよばれる広い芝地の馬場があったあたりだと言われている。また、庁舎の前の国道 25 号線は、大名小路とよばれた城郭内の道で、城下が栄えていたころは武家屋敷が建ち並んでいたとも考えられる。坂倉準三による上野市全体計画以前は、この「扇の志波」と呼ばれる外堀内にあった、二つの小学校をはじめとする校舎群を再構成して低層の建築群を計画した。

明治 22 年の町村制の実施により上野町ほか 16 村となり、昭和 16 年には阿山郡上野町・小田村・三田村・城南村・新居村・長田村・花之木村の 1 町 6 村が合併し、人口 33,000 人余りの「上野市」が誕生した。空襲を受けず、戦前のまちなみが継承され、その後も周辺町村と合併が進められた。平成 16 年 11 月 1 日、上野市・伊賀町・島ヶ原村・阿山町・大山田村・青山町の 6 市町村が合併し「伊賀市」となった。現在、合併特例債により新庁舎が三重県伊賀庁舎隣接地の民有地に、新しい庁舎と約 750 台の駐車場を配置する計画で、敷地（伊賀市四十九町字鍋沢 3183 番 1 他）の購入が進められている。

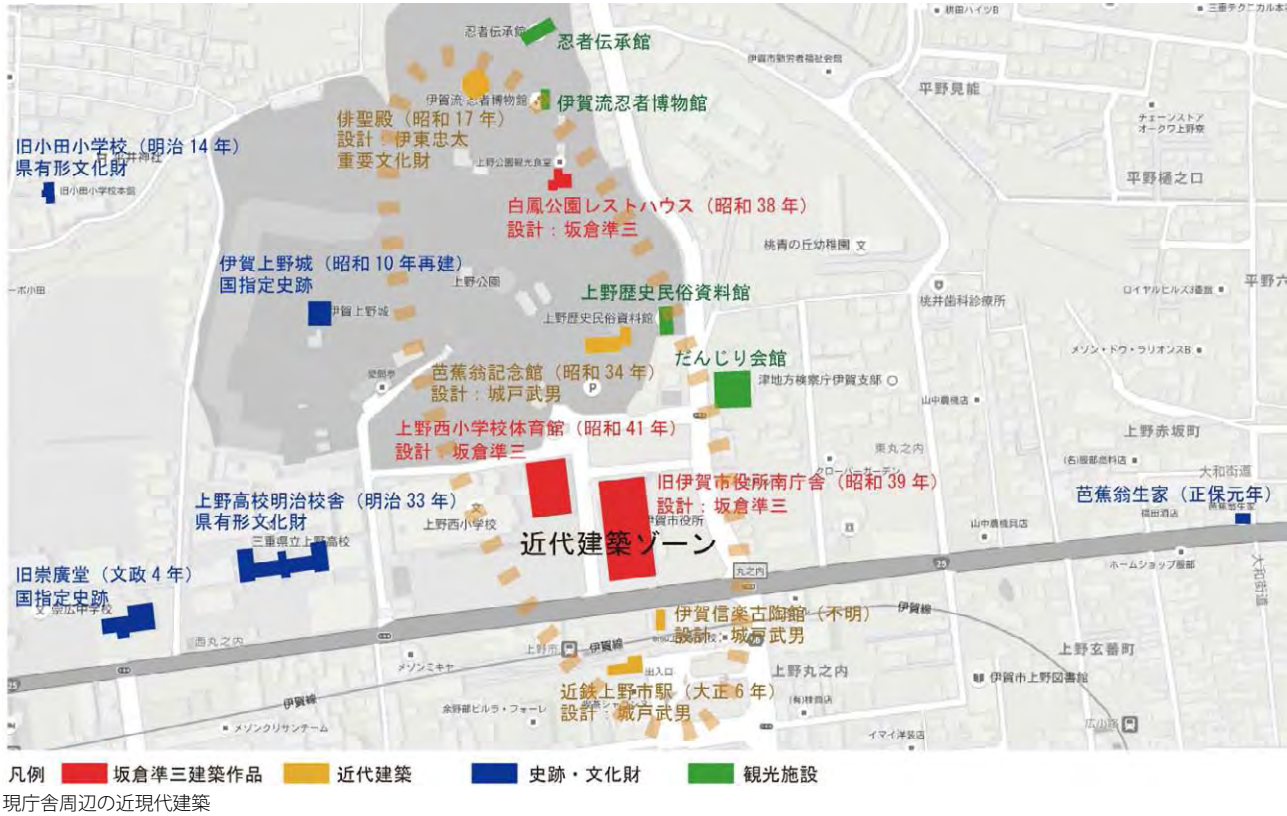
この新庁舎の検討と並行し、現在の南庁舎周辺の活性化の検討が進められ、「伊賀市の賑わい創出に向けた現庁舎地の利活用に関する提言書が平成 28 年 3 月にとりまとめられた。

伊賀上野の近現代建築

伊賀上野城のある城山の丘陵から、伊賀のまちにかけて、いくつかの近現代建築が点在している。坂倉準三の設計による建築は、西小学校、公民館、三重県総合庁舎、崇広中学校がすでにないが、現南庁舎（1964年）、西小学校体育館（1966年）、白鳳公園レストハウス（1963年）の三作品が現存している。また、松尾芭蕉生誕三百年を記念して建てられ、伊東忠太が関わったと言われる俳聖殿（1942年）、地元出身の城戸武雄設計の芭蕉翁記念館（1959年）等々や1935年に木造で復元された伊賀上野城もあり、木造建築からモダンムーブメントまで多種多様な建築をみることができる。ここ伊賀上野では、散歩や建築探訪の際には、尽きない楽しさがあり、地域活性に活用できるのではないだろうか。これらの近現代建築の中でもモダニズム建築としての現庁舎の評価は非常に高く、伊賀上野の記憶として、将来に継承すべき建物の一つである。



終戦直後の伊賀市中心部 「扇の芝」に二つの小学校をはじめとし、中高の校舎群が建ち並んでいた様子がわかる
 国土地理院 地図・空中写真閲覧サービス 1946.5.23 米軍撮影



伊賀市南庁舎〔旧上野市庁舎〕について

旧上野市庁舎の設計は当時の豊岡益人市長（1953～1965 在職）が、坂倉準三の設計した羽島市役所（1959 年竣工）を見て、坂倉に依頼してはじまった。しかし、坂倉準三、豊岡益人両氏とも一高、東京大学の先輩、後輩の間柄で、専攻は同じ美学であったため、互いの信頼関係は確固たる関係となり、市庁舎以外の学校や公会堂、県の事務所が順次つくられていくことになった。

正式な設計依頼の時期を坂倉準三建築研究所大阪支所長の西澤文隆氏は 1959 年 2 月と述べているが、恐らく 1958 年末には二人は出会っていたのではないかと考えられる^{（注1）}。依頼の内容は、二校あった小学校用地を整理して市庁舎、公民館、小学校を新築するという内容だった。最初に提出した全体計画図面があり（1959 年 3 月）、作図のサインは所員の合田信雄氏、それに基づく市庁舎の実施設計は、1959 年 5 月で所員の小川淳一氏が担当し、3 階建で 2 階にある大庇の上に議会棟や諸室を載せる計画で、伊賀城の丘陵の裾野に低層の建築群を配置した計画であった。枚岡市役所（1964 年）の円弧状の大庇による構成とは異なり、直線的な大庇のあるデザインだった。しかし、この案は、財政難で工事着手は出来ず、代わりに、市民が利用する公民館（1960）だけが単独で先に竣工し、西小学校が続いて竣工する（1 期～3 期）（1962）。以降、崇高中学（1963）、お城の休憩所（1963）、三重県総合庁舎（1964）が順次坂倉準三の設計で整備され、そして、最後に市役所の新たな設計に着手したのが 1963 年であった。これらの全ての設計にかかわった坂倉準三建築研究所の所員は、柴田勝之氏だった。市役所が 1964 年に竣工後、残っていた西小学校の体育館が 1966 年竣工し、（吉田好伸氏担当）坂倉準三による上野市の仕事が全て完了した。

現在の市庁舎の計画は、1959 年実施設計案では面積が不足したため、要望面積に対応した設計に見直す必要が生じていた。敷地の中での建物位置や 2m の段差を利用案は踏襲し、正方形に近い外形を現状の南北に長い伸びやかな長方形の外形に修正された。伊賀のまちに近い利便性の高い一階南側には、市民が来庁する窓口（市民ホール）が設けられ、半地下、中二階という断面構成で、半地下部には緑の斜面に面した食堂、中二階には業務に必要な窓口や執務スペースが計画された。市民のための市庁舎という考えから、窓口の設けられた一階は、1.5 層分の高い天井とトップライトから降りそそぐ自然光により、広場のような民主主義のシティホールに相応しい空間が意図された。公民館との間を利用して設けられた緑の斜面には、築城時の石垣の巨石が据えられ、食堂前の庭園として利用されていた。中二階の北側、当時の三重県総合庁舎側は消防署で、小学校側にはその消防署の消防ホースの干し台の突起が今も残っている。大庇は二階の上部に変更され、直下の二階は中庭を中心に諸室が配置され、中央の議場の左右に市長・教育委員会関係の諸室と議会関係の諸室が設けられた。中心の議場は中庭に開いた計画がされていたが最終的には現状の閉鎖的な議場となったと言われている。二階は一階の広場的な空間とは隔絶された中庭に面した落ち着いた静かな佇まいである。つまり、平明単純な空間構成で権威付けをしないことを基本としながら、一、二階の機能に則した空間を計画し、それらを安価な素材で、豊かな空間に仕上げられた建築で、モダンムーブメントの建築として非常に価値が高い。

現南庁舎は、伊賀城の丘陵、山裾の緑と城下町をつなぐよう低層で計画され、市民を見下げるのではなく市民を迎入れ、市民と伊賀のまちなみと共に歩む建築として建てられている。同時期の呉市庁舎、羽島市庁舎、枚岡市庁舎と地形の形状と戦災を受けずに残っていた城下町を具に見た坂倉準三が^{（注2）}、他の三庁舎と異なる低層の庁舎デザインを生み出したと考えられる。その市民を優先した低層の建築計画は他に例を見ない先進的なもの^{（注3）}であり、都市的に見ても城下町の屋並みの高さで共生した現代に通じる形態である。庁舎は、軍や国家、士族や官人のための建築でなく、戦後日本で求められた民主主義の思想に基づいた市民のための建築として、ル・コルビュジエが提唱していたモダンムーブメントの考えを反映した代表的な庁舎建築である。

これらの設計は、坂倉準三建築研究所の大阪支所で実施された。当時、東京と大阪の事務所があり、坂倉準三に直接依頼があったこの仕事は、坂倉が足しげく来阪し図面を見て指示して進めていた。西澤文隆支所長以外は全員同列で坂倉準三は所員を「君」「さん」付けで呼び、「大きな声」^{（注4）}を響かせて設計の指示を出していた。工事費も厳しかったが、設計者の現場監理予算も厳しく、常駐する予算がないため巡回監理^{（注5）}と言われていたが、それではよい建築はできないため、実際には所員が現場に泊まり込んで監理をしていた。また、外構の緑化の予算も乏しく、安いクヌギを探して植えて、緑の嵩を増やす工夫をしていた程だった。当時の設計者、施行者が戦後の復興期に、明日の日本に思いを馳せて、努力を惜しまず造り上げた建築であり、二度と出来ない後世に伝えるべき貴重な建築である。



1966 年の上野城とその周辺 日本瓦の屋根と上野城の間に、坂倉準三の低層の新しい建築が建ち並んだ様子。ここに 5, 6 階の庁舎が建っている姿と比較すると、坂倉準三の考えた上野城の丘陵を主役とした構想を理解できる。 出典：「濱邊貴余晴写真帖 伊賀万華鏡」2001 年 4 月 27 日 株式会社郷土出版社



新築時の庁舎の南側からの俯瞰 奥に三重県総合庁舎、左に公民館が見える

出典：「新建築 196509」 新建築社

（注 1） 2016 年 6 月 26 日「伊賀市役所を使い続ける」DOCOMOMO Japan 関西の選定建築を巡る Part2 のシンポジウムでの好川忠延氏講演

（注 2） 同上のシンポジウムで、計画時に坂倉準三が敷地を綿密に 3 日間調査していた姿を見たとの話が残っているの報告があった。

（注 3） 近年低層型の庁舎として立川市庁舎等が、市民の利便性と環境共生の観点から建築界では話題になっている。（注 4） 坂倉準三の声が大きく、事務所でその声が響いていたと言われ、逝去後に出版された追悼本は、「大きな声」という書名で出版された。（注 5） 工事着手後の設計者が建築士法に基づき工事監理を行うが、設計工事監理料の予算が厳しい場合に例えば週 1, 2 回の通いの工事監理となる場合があり、「巡回監理」とも言われている。

建築家坂倉準三とその作品

坂倉準三は、1901年（明治34年）岐阜に坂倉又吉の四男として生まれた。生家は羽島にある千代菊という酒蔵を営んでいた。岐阜の中学を卒業後第一高等学校に入学し、東京帝国大学美学美術史学科へ進学した。やがて美術史から建築史へ興味が傾倒し、病のため一年遅れ、1927年（昭和2年）にゴシック建築に関しての論文で大学を卒業した。卒業する前からル・コルビュジエのもとへ行くことを決意していたと言われ、兵役の後、1929年8月に渡仏した。そして、ル・コルビュジエに会い、彼の勧めもあり土木学校で建築を修学したのち、1931年30歳でル・コルビュジエのアトリエに入所した。それから約5年間、師事することになり、その間、ル・コルビュジエをはじめ、シャルロット・ペリアンら多くの建築家やデザイナーと交流し、坂倉準三の建築に対する考え方がつくられていった。日本人の弟子としては、もっとも長くル・コルビュジエのアトリエに在籍し、「ソビエト・パレス（1931）」、都市計画の「アルジェ都市計画」「ストックホルム都市計画」「輝く農村と農場」等の都市計画や「ナンジェセール・エ・コリ通りの集合住宅」「救世軍本部」等の実施設計をはじめ多くの作品を担当していた。やがて、1936年に一時帰国するが、前田健二郎設計の《パリ万国博覧会日本館》の工事監理のため再渡仏した。しかし現地は斜面地で木々も残すことが必要だったことから、坂倉準三が新たに設計し、《パリ万国博覧会日本館》が1937年に竣工した。1937年の《パリ万国博覧会日本館》は、アレヴァ・アアルトの《フィンランド館》、ホセ・ルイ・セルトの《スペイン館》等とならび建築部門グランプリを受賞、37歳で建築家として世界的にデビューした。この時、坂倉はコルビュジエのアトリエを借りて設計を進め、スタッフが手伝った記録がのこっており、グランプリの賞金の一部をコルビュジエに支払っていた。再びコルビュジェのアトリエに出入りした後、世界が第二次世界大戦に向けた不穏な空気が漂いはじめた1939年に日本に帰国し、西村伊作の次女のユリと結婚、1940年に坂倉準三建築研究所を設立し、約30年間作品を創り続けていった。主な作品は下記のとおりで、多様な用途の作品があることが確認できる。

- 1940年 新京ポートハウス計画
- 1941年 飯箸邸 シャルロット・ペリアンが来日し「選択・伝統・創造」展の開催に協力 組立建築の試行
- 1942年 レオナルド・ダビンチ展
- 1944年 龍村邸（兵庫）
- 1948年 高島屋和歌山支店
- 1950年 大阪スタジアム 加藤久朗邸
- 1951年 神奈川県立近代美術館 鎌倉館本館 東京日仏学院
- 1952年 クラブ関西
- 1954年 関西電力丸山発電所 東急会館 岡本太郎邸（現・岡本太郎記念館）
- 1955年 国際文化会館（前川國男・吉村順三と共同設計）
- 1957年 東急文化会館
- 1957年 南海会館
- 1959年 羽島市庁舎 シルクセンター国際貿易観光会館
- 1960年 **上野市公民館**
- 1961年 塩野義製薬中央研究所 西条市体育館
- 1962年 呉市庁舎・呉市民会館 東洋レーヨン基礎研究所
- 1963年 羽島市勤労青少年ホーム 佐賀県体育館 大阪府立阪南高等学校
- 1964年 **三重県上野総合庁舎 上野市庁舎**（現・伊賀市南庁舎） 枚岡市庁舎（現・東大阪市旭町庁舎）
芦屋市民センター 市民会館本館 ホテル三愛（現・札幌パークホテル）岩手放送会館
- 1965年 東京近鉄ビル
- 1966年 神奈川県立近代美術館鎌倉館新館 神奈川県庁新庁舎 新宿駅西口広場 名古屋近鉄ビル
- 1967年 小田急電鉄新宿駅西口本屋ビル 岐阜市民会館 山口県立山口博物館
旧大阪府立総合青少年野外活動センター 駐仏日本大使公邸
- 1968年 羽島市民会館
- 1969年 芦屋市民センター 市民会館ルナ・ホール タイ国文部省職業教育学校・日本人学校
- 1970年 大阪万国博覧会電力館 奈良近鉄ビル 国鉄渋谷駅西口ビル（現・東急百貨店東横店南館）
- 1971年 宮崎県総合博物館 ホテルパシフィック東京

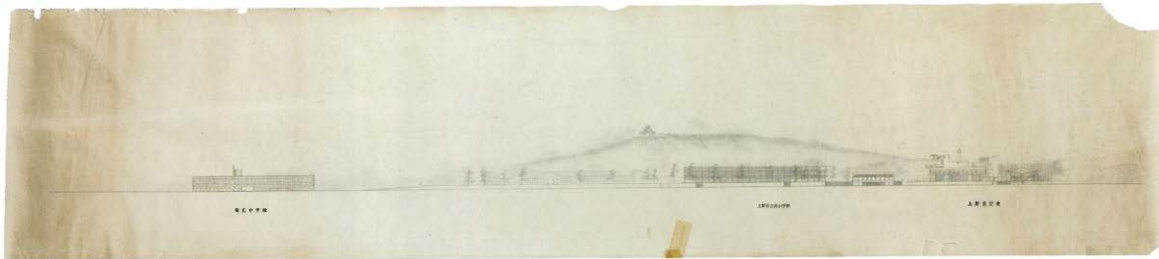


建築家 坂倉準三

出典：「建築家坂倉準三 モダニズムを生きる 人間、都市、空間」

2009年5月30日ー9月6日 神奈川県立近代美術館 鎌倉 建

築家坂倉準三展カタログ



伊賀全体計画 低層の建築群を建ち並べる基本方針が読み取れる

出典：「建築家坂倉準三 モダニズムを生きる 人間、都市、空間」2009年5月30日ー

9月6日 神奈川県立近代美術館 鎌倉 建築家坂倉準三展カタログ

坂倉準三の作品群の中での伊賀市南庁舎

坂倉準三は、1969年に突然心筋梗塞で逝去したが、生前、実作だけでも四百件を超える作品を残し、約150人の所員が、事務所から巣立っていった。坂倉準三が残した作品の中で、庁舎建築としては、羽島市庁舎（1959年4F）、呉市庁舎（1962年9F）、枚岡市庁舎（現東大阪市旭町庁舎1964年4F）、神奈川県庁舎（1966年12F）があり、現伊賀市南庁舎（旧上野市庁舎）があり、比較すると他は多層で高い庁舎建築である。この現伊賀市南庁舎のみ、高さは丘陵側（北側）からは2層しかなく、周辺の環境を坂倉が読み取り、今から半世紀前に敢えて低層庁舎を提案している。低層でありながら市民ホールとなる1階は、高低差を利用して1.5層の豊かな大空間とし、2階は中庭を配した静かな空間を生みだしている点は、坂倉準三の多くの作品の中でも、他に例がない。特にその一階の市民ホールは、自然光を採り入れ、外部のピロティ空間を室内化した空間で、秀逸である。

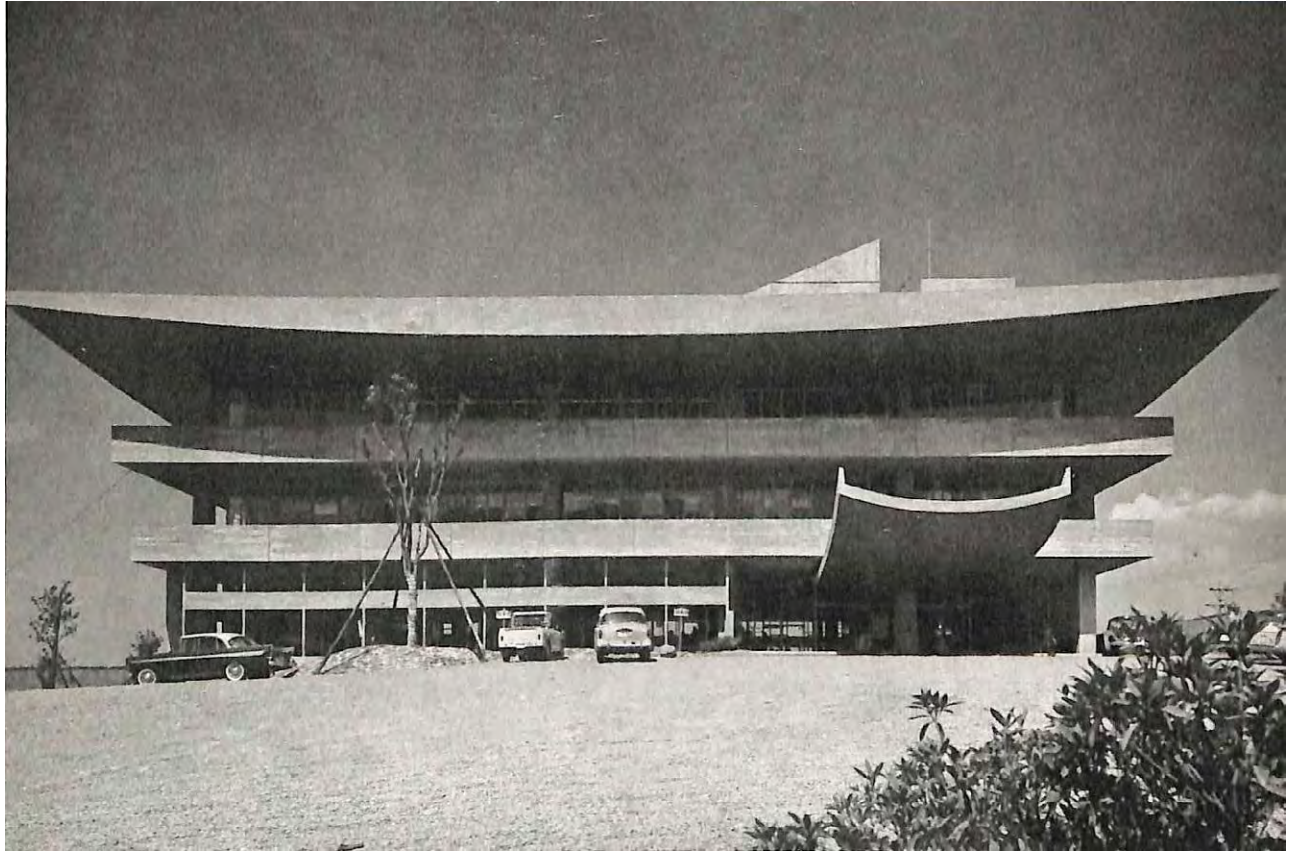
ル・コルビュジェの作品として世界遺産に登録された国立西洋美術館（1959年）の設計に際しては、三人の弟子が実施設計を担い、パリから送られてきた図面をもとに、坂倉準三が建築（意匠）、前川國男が構造、吉阪隆正が設備の実務を行った。坂倉はル・コルビュジェのアトリエで、日本人としては最も長期間学び、ル・コルビュジェとアトリエの所員の信頼を得ていた。そして、ル・コルビュジェの「人間のための建築」という基本理念と五原則（注6）の考えを、この現伊賀市南庁舎の設計に注ぎ込んだ。

また、坂倉準三の作品には、公共施設だけでなく、ターミナルの広場、商業施設やホテルといった市民が日常利用する民間施設が多い。新宿西口広場や渋谷の東急関連の建築群はその顕著な例である。そして、東名高速道路の料金所（トールゲート）等、市民が快適に生活するために必要となる建築をいかに美しくするかに精力を傾けていた。このトールゲートの基本設計は、高速道路の無料化に備えて撤去可能なプレキャストコンクリート（工場で造られたコンクリートの部材の組み合わせ）で考えられ、日本全国的高速道路の料金所に採用され、一部は今でも利用されている。これらの作品群に、ル・コルビュジェの思想を反映させ、市民が主役である戦後日本の風景をつくっていった。

この考えは坂倉準三の逝去の後も、坂倉建築研究所として継承され、現在もすぐれた作品を生みだしている。

（注6）ル・コルビュジェが提唱した新しい建築の五つの原則で近代建築の五原則とも言われる。具体的には「ピロティ」「自由な平面」「自由な立面」「独立骨組みによる水平連続窓」「屋上庭園」を指す。

下：竣工時の小学校側からの外観 「196509 新建築」より 新建築社



上左：羽島市庁舎 上右：呉市庁舎と市民会館

出典：「建築家坂倉準三 モダニズムを生きる 人間、都市、空間」2009年5月30日－9月6日 神奈川県立近代美術館 鎌倉 建築家坂倉準三展カタログ

下：枚岡市庁舎（現東大阪市旭町庁舎）：出典：「近代建築 196509」

竣工時の姿

近現代建築の中でもモダンムーブメントの建築は、戦後の日本の高度成長期に計画された建築が多い。予算と物資がなかった時代に、いかに市民のための建築をつくるかが求められていた。当時は、冷房が未設置だったり、法的にも現在と同等な避難や安全対策がなかった時代のため、その後の機能更新の改修により、優れた空間が見えづらくなってしまっていることが多い。竣工時の外装のコンクリートは白く、一階市民ホールも整然と家具が並び自然光に溢れていたことがわかる。竣工時の写真を当時の雑誌から引用する。



上：竣工時の上野市庁舎
「建築家坂倉準三 モダニズムを生きる 人間、都市、空間」2009年5月30日－9月6日 神奈川県立近代美術館 鎌倉 建築家坂倉準三展カタログより
右：1階 市民ホール
「196509 近代建築」近代建築社より



左：1階事務室（市民ホール） 上上：議場 「196509 新建築」より
上下：ギャラリーより玄関を見る 「196509 近代建築」より
下：玄関ホールを見る 「196509 新建築」より



再生計画 忘れ去られた《伊賀と市民》を考えた半世紀前の思想を活かす

坂倉準三は伊賀上野城の丘陵、山裾の緑と城下町をつなぐよう低層で計画され、庁舎が市民を見下げるのではなく市民を迎入れ、市民と伊賀の美しい旧城下町と共に歩む建築として考え、低層の建築群を設計した。市民のための建築であり、また、丘陵の緑をできるだけまちと繋げ、修景しようと試みていた。それは、ル・コルビュジエから坂倉準三が学んだモダンムーブメントの考え方であり、その考えをこの伊賀上野で巧に作品に展開させた。再生計画にあたっては、現在でも求められている《伊賀と市民》の考えを継承しながら、現代の機能に更新し賑わいの核となる図書館・市民ギャラリー等のコミュニティ施設を目指す。

□現庁舎の外観を保全し伊賀の景観の美しさを未来に繋げる

伊賀の丘陵を主役として考え、建築群の高さを抑えることによりそこに新たな異物を出現させずに、低層のまちなみと丘陵が連続した美しい景観とする。

□丘陵の緑を拡げ修景する

当初、坂倉準三が丘陵の緑を旧城下町につなげるため緑地として考えていた、旧三重県総合庁舎跡地をできるだけ緑化し、城山の緑を市街地方向に拡張し修景する。

□賑わいの核となる複合施設

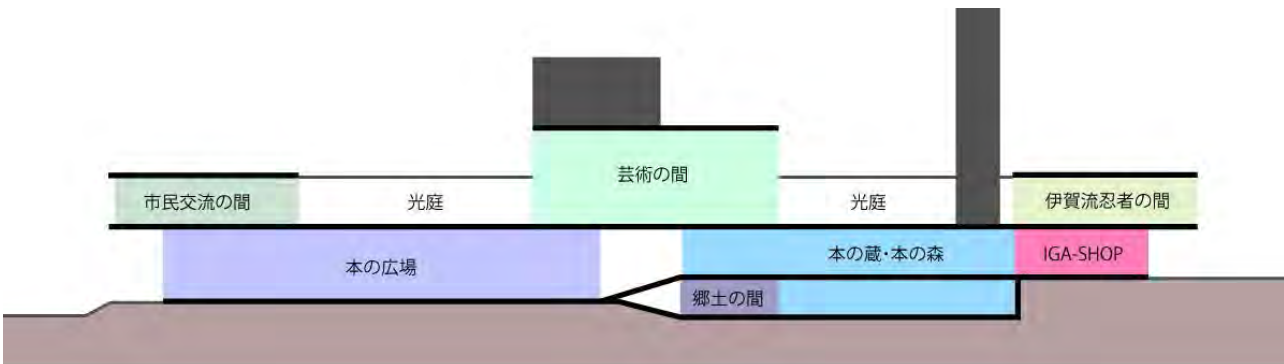
市民だけでなく、観光客も利用できる複合施設とする。そのため駅・市街地（旧城下町）からの動線と、城山からの動線の双方を確保し、現庁舎の玄関に図書館と市民ギャラリー等へのメインエントランスを設け、旧消防署部分に城山方向からのエントランスを設ける。
城山側のエントランスには観光案内所、みやげもの等のショップが配置され、城山へ向かうガイド機能をもたせる。

□高低差を活用したゾーニングと回遊性

1 階部分と中 2 階、半地下を一体利用し、図書館機能を配置、2 階にギャラリー、市民交流センター、忍者研究センター等を配置する。内部空間はできるだけ回遊性をもたせて、図書館に来館した市民がギャラリーを訪れたり、観光客が観光案内所から図書館の郷土誌コーナー「郷土の広場」にも立ち寄れるよう動線を確保する。

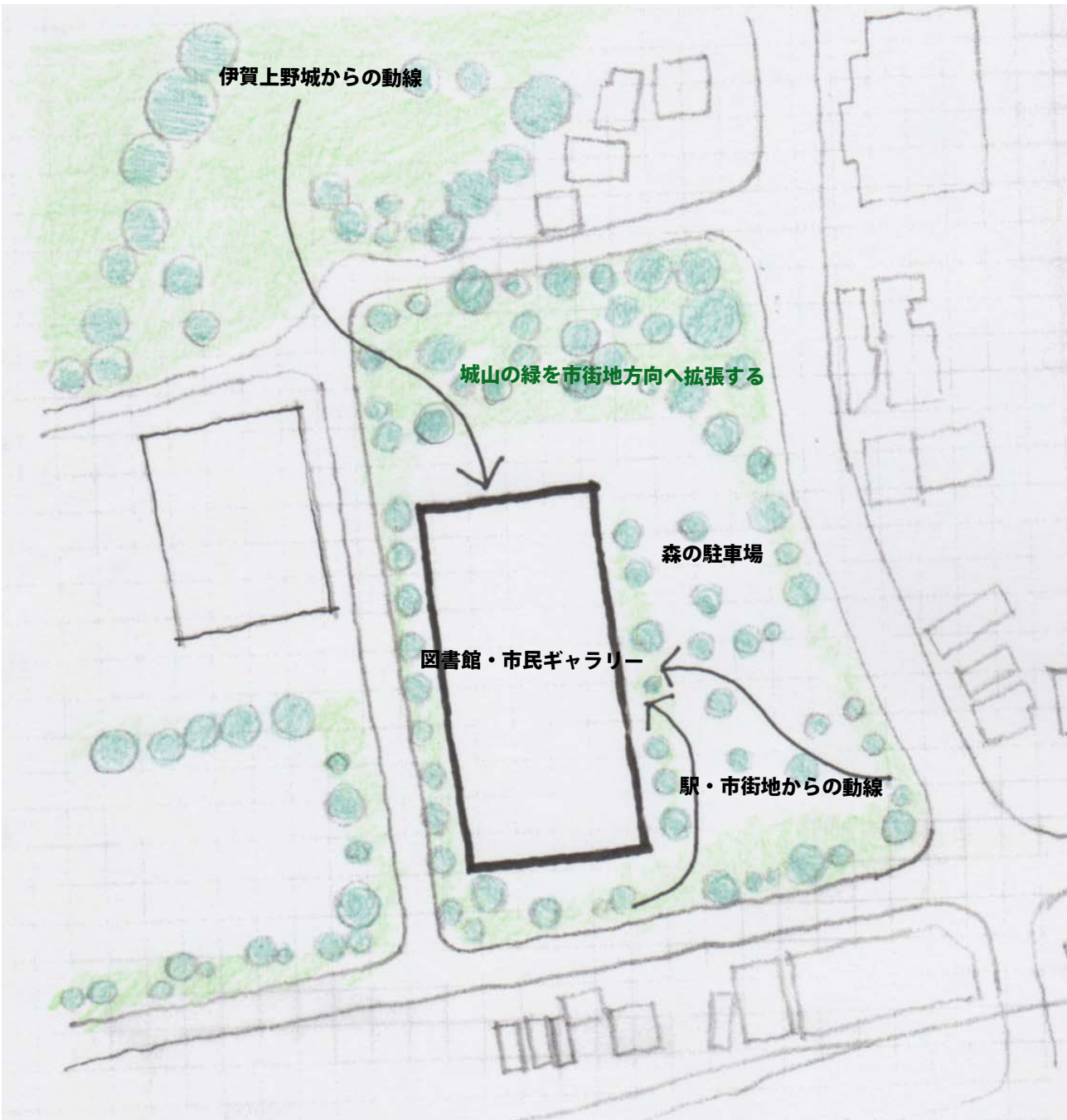
□新築と同様のバリアフリー化

半地下、中 2 階にも着床する車椅子対応の ELV を設け、バリアフリー化するとともに、誰しものが使いやすくわかりやすいユニバーサルデザインの再生計画とします。



断面ゾーニング図 1 階と半地下、中 2 階を図書館として一体に利用し、2 階をギャラリー、市民交流センター、忍者研究施設とし、比較的目的意識のある人々が訪れる配置とする。

下：配置イメージ 旧三重県総合庁舎の跡地にできるだけ樹木を植え、城山の緑を拡大し市街地につなげ修景する。伊賀上野城を訪れる観光客の動線からアプローチしやすい位置に、観光案内所、ショップ等を計画する。またこの動線からも 2 階のギャラリーにアプローチでき、回遊性を高める。



再生計画 賑わいのあるコミュニティ図書館

最近の地域図書館は、単に学習・研究する場から、市民が楽しみ交流する施設へ変わりつつある。子供達が両親・祖父母とキッズコーナーで遊んだり、中高生がヤングアダルトコーナーで放課後に勉強交流し、高齢者が新聞・雑誌コーナーに日々立ち寄ったりと、老若男女が時間を過ごす場として利用されています。また、ここでは、観光客が郷土コーナーで調べものをしたり、レファレンスではリターン・1ターンの若者・中年が何か起業しようと相談したり、人々が何かを知りたい時に訪れる場にもなるかもしれません。多様な人々がお茶を飲み、交流できる賑わいある図書館を計画します。

市民を迎い入れる親しみやすいコミュニティ図書館

高低差を利用し、まちの中心部から市民が入りやすい南側の大空間を現状のまま活用し、子供から老人まで、市民がくつろげる「本のある市民の広場」＝「本の広場」を計画する。この広場は、老若男女が集い、個々の時を過ごすだけでなく、コーヒー、時にはビールも飲みながらコミュニケーションできる「まちの広場」となる。

見る見られる吹抜のある開放的な市民の施設

コミュニティ施設は開放的な設えとし、内外部の人々が出会い交流し、インフォーマルコミュニケーションが生まれる場でもある。そこで、半層スキップの構成を利用し、上下の空間が視認できる吹抜を計画する。

新築同様の図書館の機能に改修する＝「保存のための再生でなく、再生のための保存」

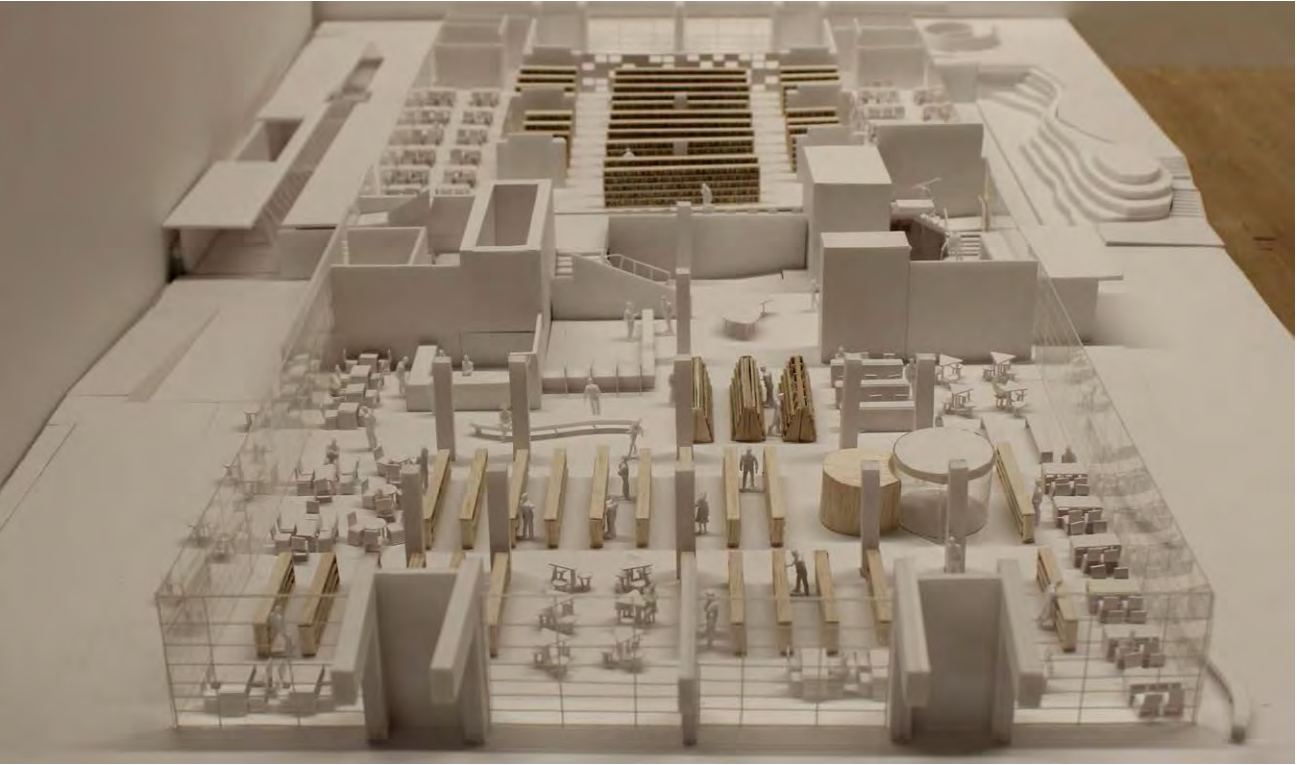
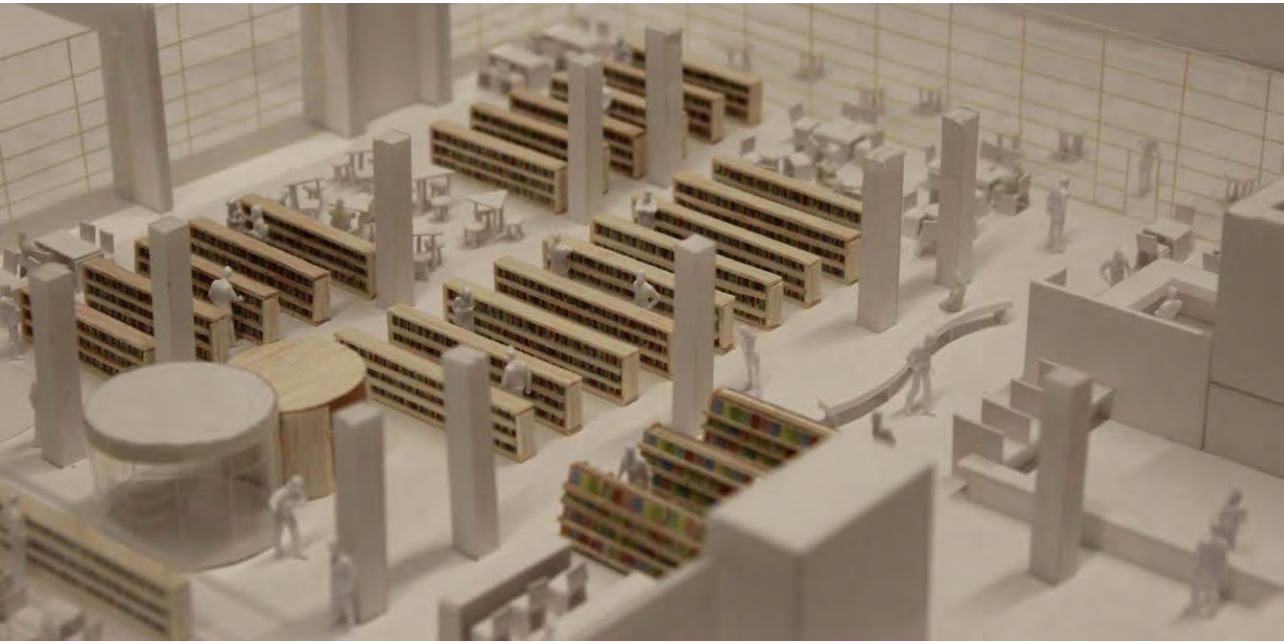
新築図書館に要求されている将来の収蔵冊数 40 万冊等を確保した開架及び閉架書架を配して「本の森・本の蔵」を計画する。また、効率的な管理運営が可能な平面計画とする。

にぎやかな図書館の中のサイレント空間

市民の図書館に対する要求が近年急速に変わりつつあり、にぎやかな図書館も増えつつある。しかし、研究や学習のための静かな空間も必要で、旧食堂エリアにサイレント空間を設け、2 階北側には会議でもグループ学習でも利用できる計画とする。



上:本の広場イメージ 左:本の広場模型写真 低書架で見通しを確保した大空間の中にカフェ、キッズコーナー、ヤングアダルトコーナー、新聞・雑誌コーナー、読み聞かせルーム、授乳室を配置する。また、受付ではレファレンスや様々な情報に応えられるカウンターを設け利便性を向上させる。
下:南側1階の本の広場から中2階の本の森/本の蔵を見た模型写真。見通せる空間で、一体に利用できる。



再生計画 多目的に利用できるギャラリー・市民交流センター

1 階のオープンな図書館とは対称的に、2 階は 2 つの中庭の周囲にギャラリー、市民交流スペース等が配置され、落ち着いた空間で市民が交流できる施設となります。

□現状平面を活かした回遊性のあるギャラリースペース

観光客らが、伊賀上野城見学のあとに立ち寄れる入口を北側に設け、多様なアプローチを可能とする。また、既存の中庭を活かして、3 階の市民ギャラリー、市民交流センター、忍者センター等々の回遊性を確保する。

□市民が交流する

市民交流センターでは、NPO や市民団体が打合せで利用したり、ギャラリーを使った情報発信、作品発表が可能です。ギャラリーを利用した後に、図書館へのたちよりやブックカフェの利用も想定され、相乗効果で市民が集う施設となることが可能です。現在は閉鎖的な壁で仕切られていますが、一部をガラス化し、中の活動が見えたり、中庭を通して市民が出会ったりとするコミュニティ・コリドーとなります。

□市長室等を見学施設として活用する

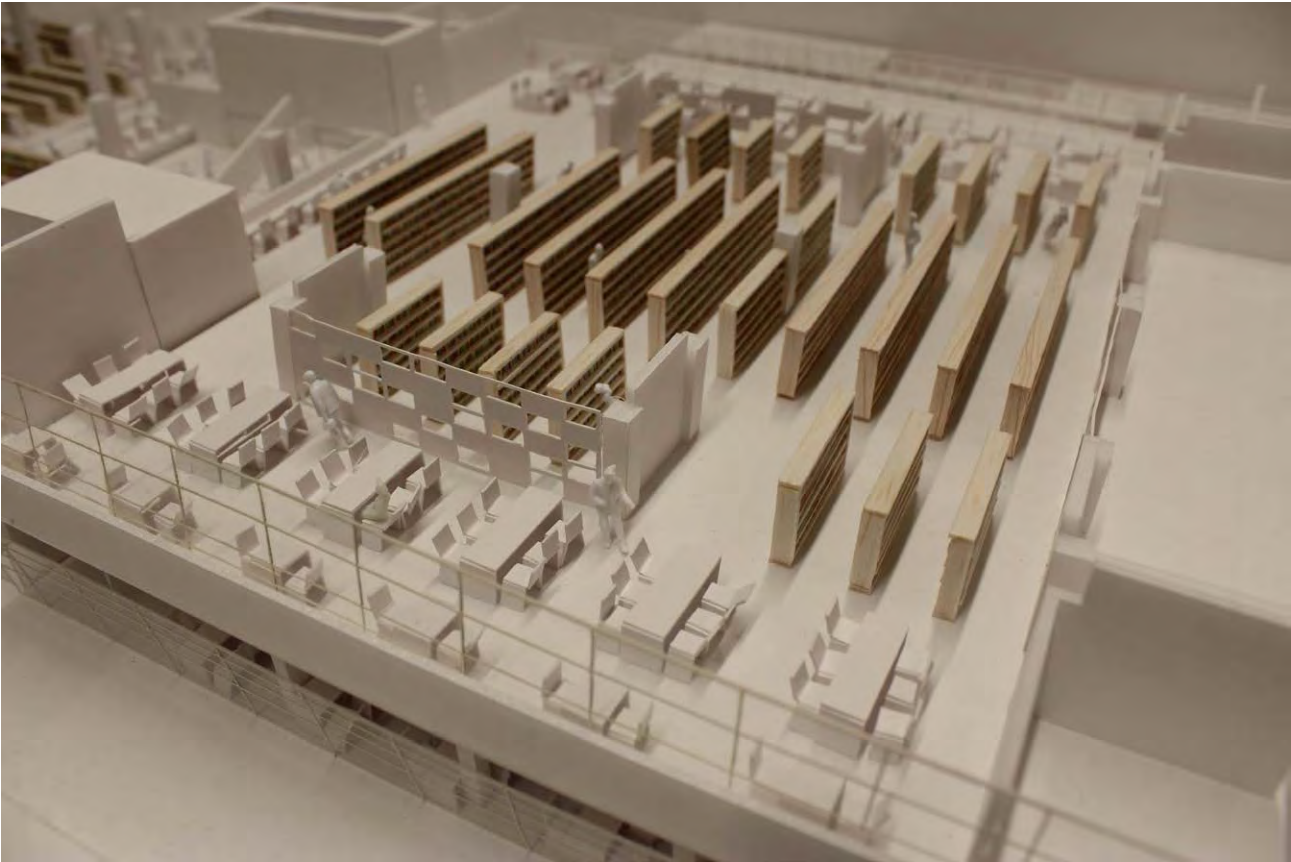
市長室等を保存し、歴史を説明するパネル、建築図面、模型等を展示し、観光客や建築関係者や学生が訪れることができる空間とします。伊賀上野城周辺の近現代建築と合わせて、建築探訪等の拠点とすることも可能です。

再生計画 全体面積 書籍収蔵冊数

機能	想定規模	計画面積
図書館	3000㎡～3600㎡	本の広場:810.9㎡ 郷土の間:104.8㎡ 学びの間:147.9㎡ 一階管理スペース:364.8㎡ 中二階管理スペース:84.2㎡ 本のカフェ(室内):118㎡ 本のカフェ(テラス):97㎡ 地下1階本の蔵:597.1㎡ 中二階本の蔵:874.8㎡ その他:141.2㎡ 合計:3340.7㎡
観光案内・情報発信	150㎡	ショップと一体化
美術展示	400㎡	ギャラリー:220.2㎡ 市民ギャラリー:148.1㎡ 管理スペース:48.3㎡ 合計:366㎡
物産販売	200㎡	ショップ:180㎡(不足分は2階を利用)
忍者研究センター	1000～1500㎡	456.4㎡
市民交流センター		224.2㎡
2階部分その他		ホワイエ:42.1㎡ その他:1667㎡ 合計:1709.1㎡
新施設のボリューム	約6000㎡	6325㎡

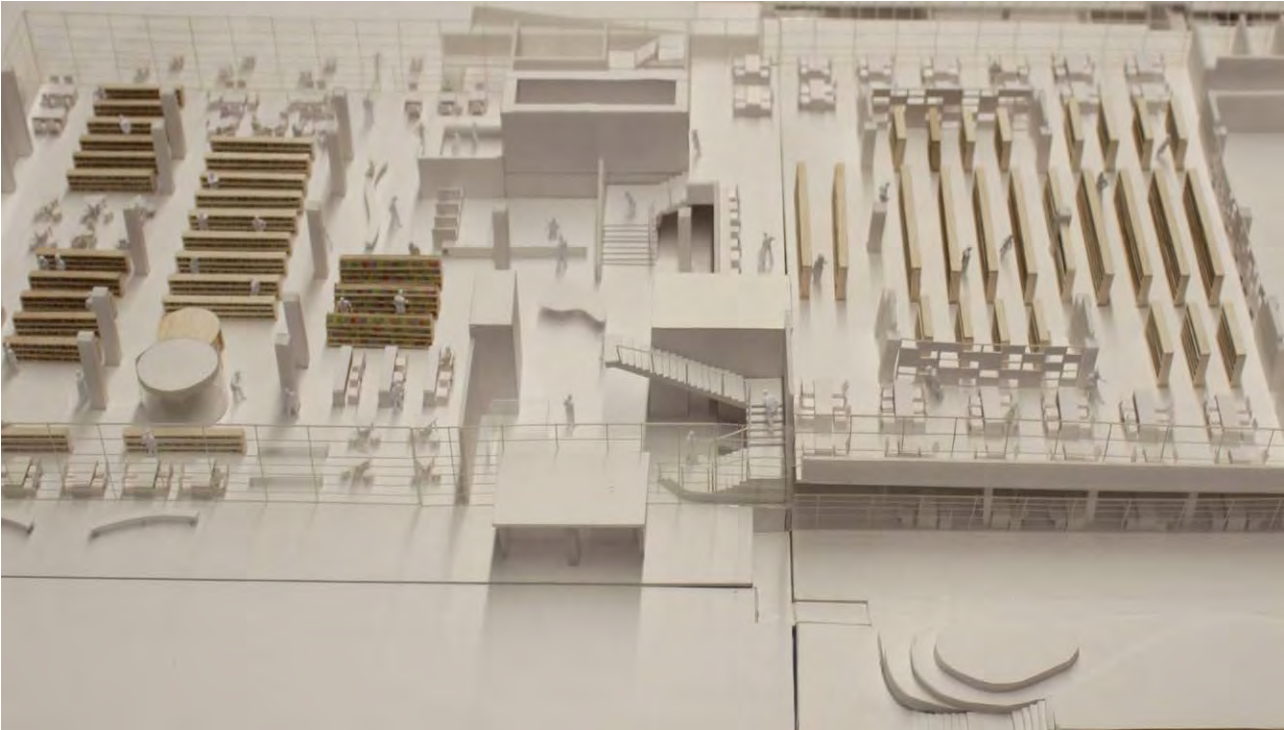
蔵書収用数	面積	蔵書収用数(一段90cmを40冊で計算)
1階開架書庫	1240㎡	58,400冊
中2階開架書庫	954㎡	77,760冊
地下1階集密書庫1	368㎡	101,920冊
地下1階集密書庫2	272㎡	169,680冊
地下1階貴重書庫	36㎡	20,000冊
合計	2870㎡	427,760冊

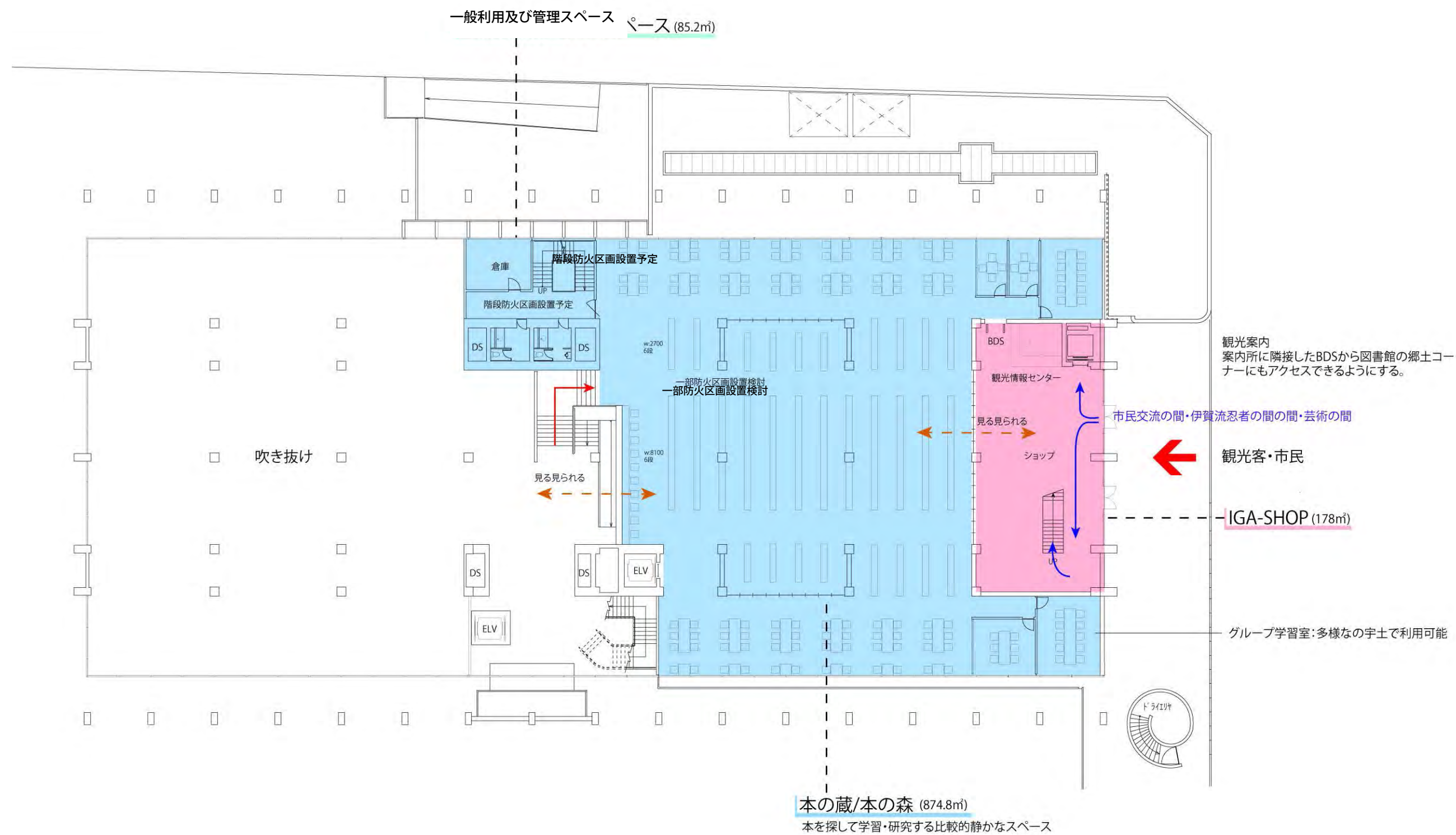
1階開架は4段、その他の開架は6段、集密書架は7段で算出

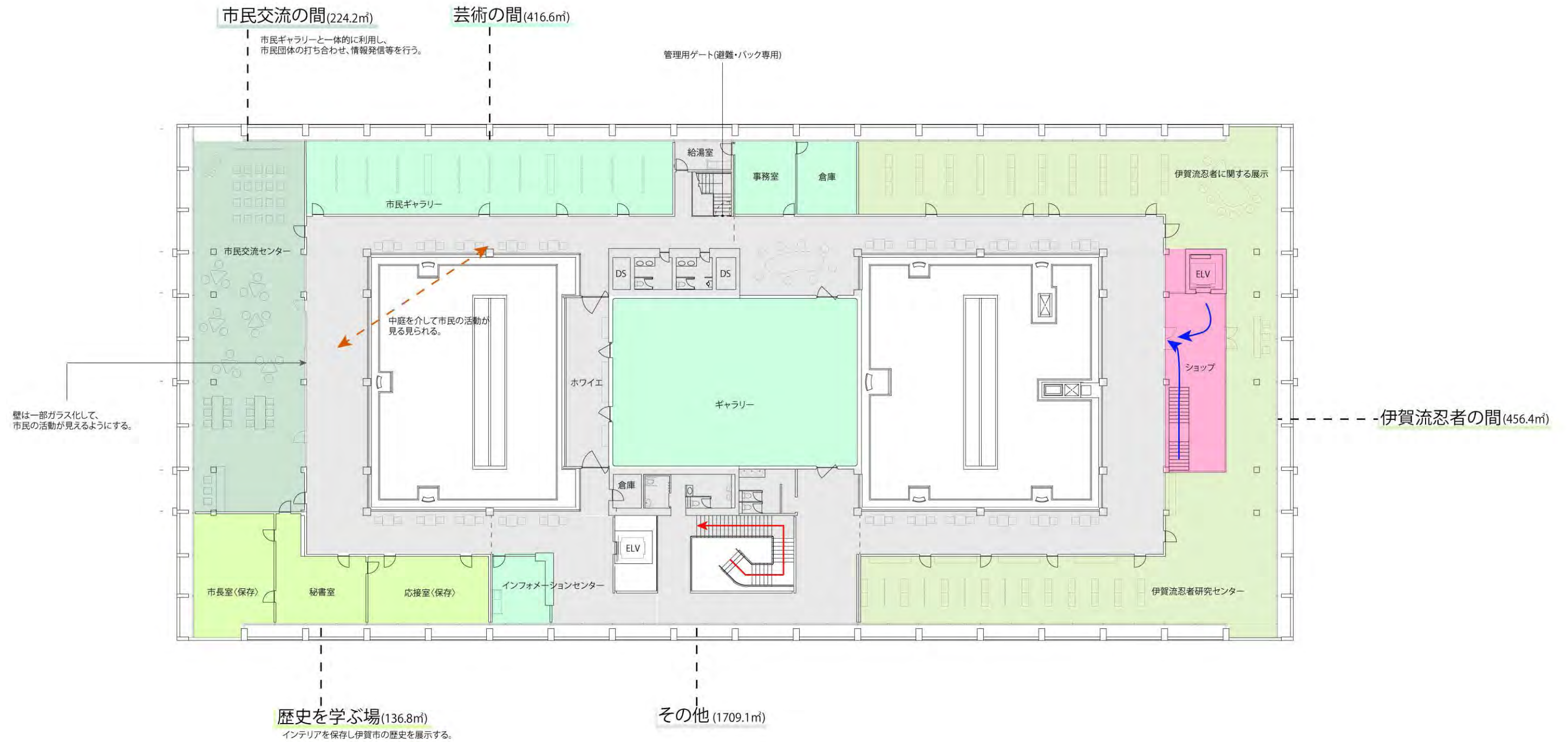
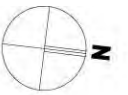


中 2 階の「本の森 / 本の蔵」の模型写真

1 階から中 2 階につながる「本の広場」「本の森 / 本の蔵」を見た模型写真 1 階から中 2 階の連続した図書館スペースが生まれる。







再生計画 機能から補強を考えたブレースのない耐震補強

□再生計画で配置された新しい壁を耐震補強として活用する

機能を更新するために新たに設置する壁を耐震壁として活用する。例えばバリアフリーで必要となる車椅子用 ELV の壁を耐震壁として活用する。

□意匠と機能に問題の無い耐震補強方法

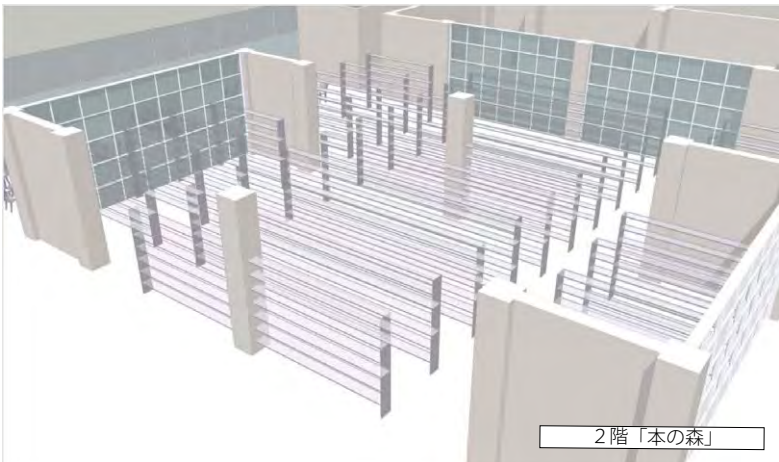
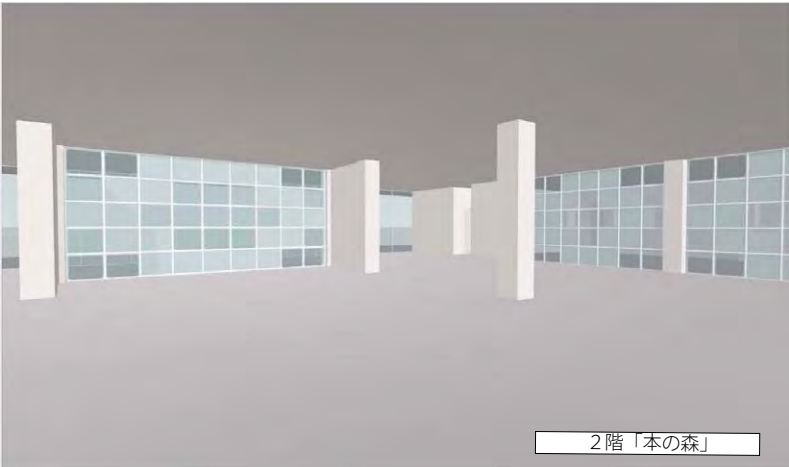
「本の広場」となる大空間の耐震補強は、既存壁の増し打ち等で補強し、新たな補強壁やブレースが必要とならないよう計画する。

□機能更新の補強

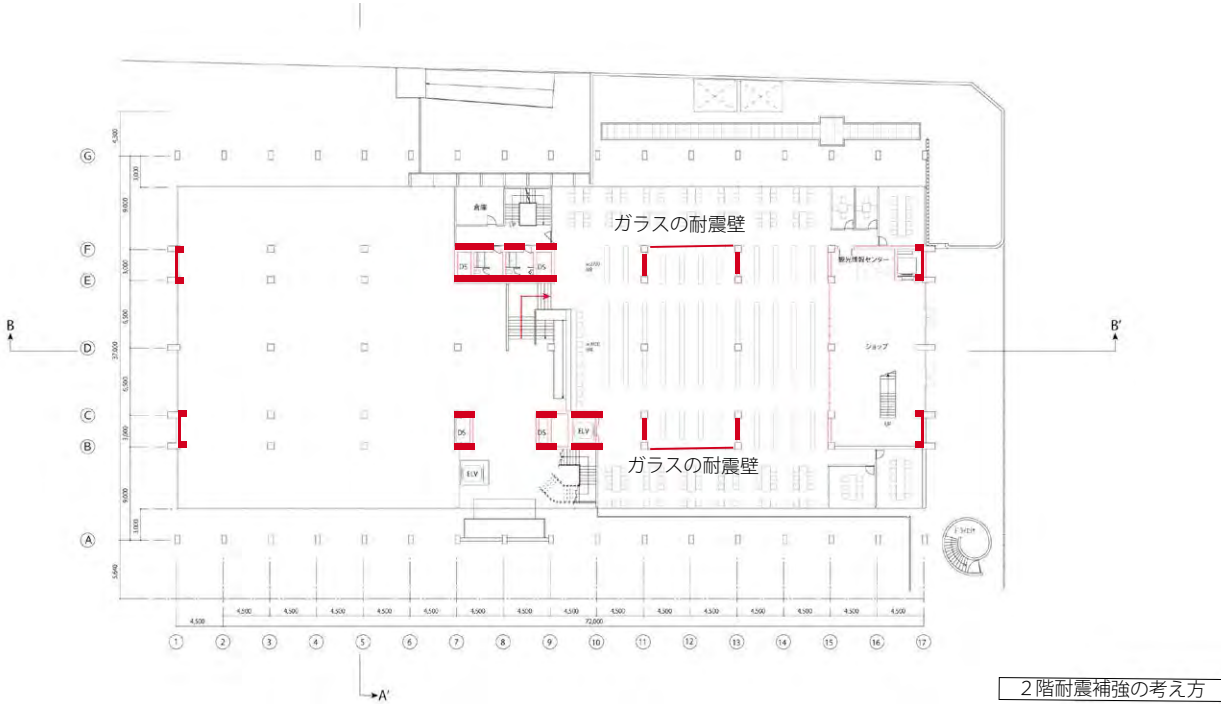
図書館は書架があるため床荷重が大きくなる。そのため、集密書架は最下階に配置し、2 顔の開架書架下部分は必要に応じて床梁の補強を実施する。

□ガラスの耐震壁

ガラスの耐震壁の利用により、閲覧コーナーと書架コーナーを分離しながら、見る見られる関係を維持する。



1 階耐震補強の考え方



2 階耐震補強の考え方

再生計画 コストをおさえた改修

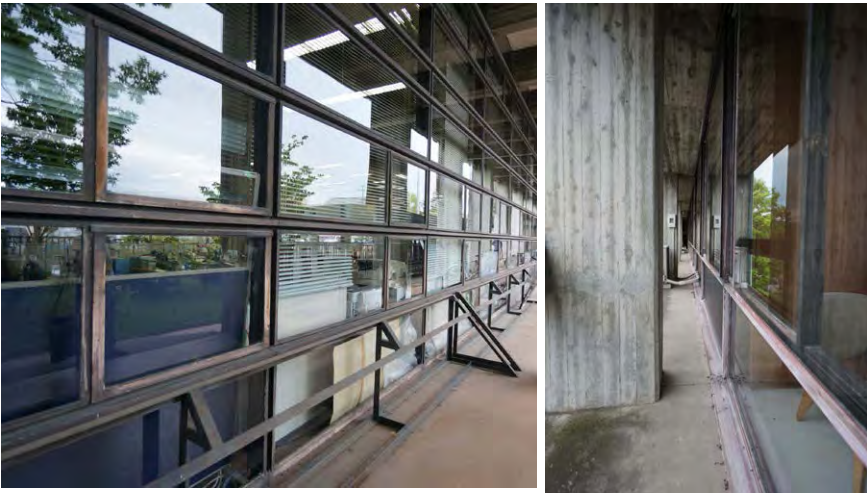
□できるだけ使える材料は使う

使える材料をできるだけ使い改修コストを低減するとともに、建築の価値（オーセンティシティ）を継承する。その結果、新築の建物にはない、味わいある建築に改修することが可能。
例えば、大庇の下の外部のスチールサッシは、雨がかりのない部分の利用が可能で、再利用を検討する。断熱性能を確保するため、一部のガラスは複層ガラス化を検討する。

□歴史調査を実施し改修する

坂倉準三が設計時に考えたこと、過去の改修履歴を調査を踏まえて改修計画を立案する。

大庇の下のスチールの建具はまだ健全で再利用が可能



再生計画 図書館のイメージ

□武蔵野プレイス

駅前にあり 22 時頃まで開館し、夕方からは 1 階カフェでビールを飲むことも可能。多くの市民で賑わっている。



□岐阜県立図書館 メディアコスモス

木材を使った大空間をやさしく人々を迎入れている。低書架の開放的な空間で 1 階に飲食やホールもある。



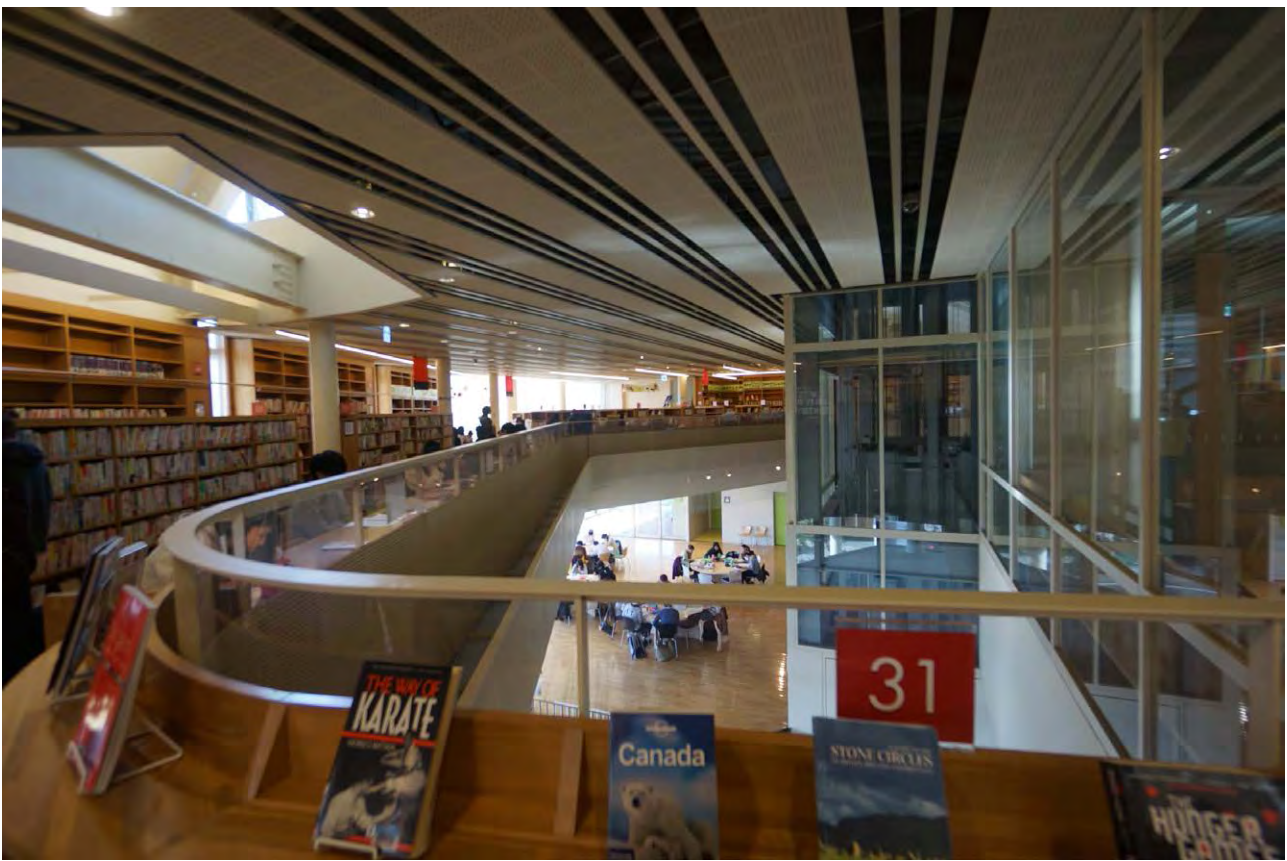
□武雄図書館

佐賀県武雄市の既存図書館の改修。運営を外部委託し話題となっている。多くの人で賑わっている。



□和光大学ボプリホール 南町田図書館

駅の直近にあり、レストラン、ホール等との複合施設。吹抜廻りの 2 階に図書館が配置されている。



再生計画 保存再生の事例

□国際文化会館

DOCOMOMO 選定建築の再生事例。坂倉準三・前川國男・吉村順三の建築を現代の機能に更新。



□日土小学校

DOCOMOMO 選定の木造モダニズムの小学校。修復改修し重要文化財に指定され、現在も小学校として利用。



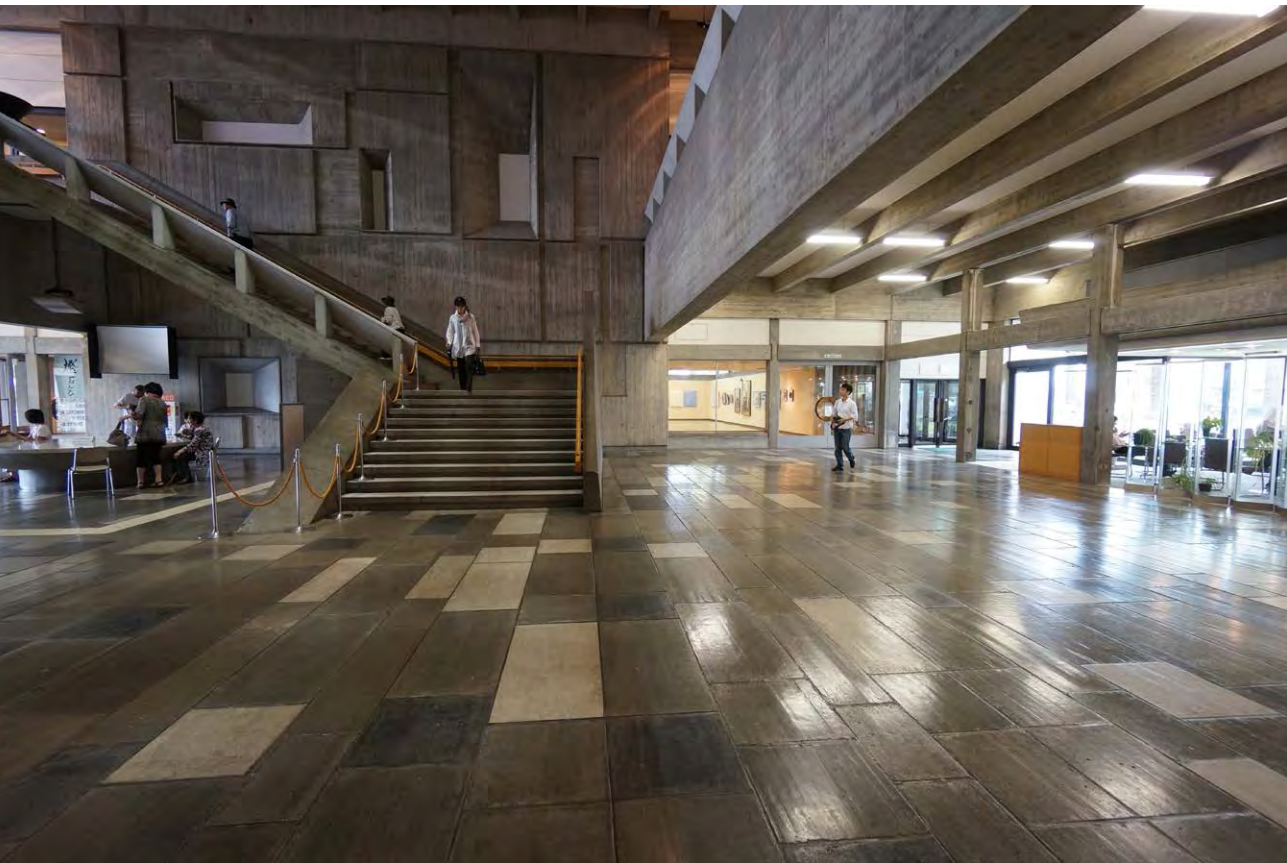
□茨城県立図書館

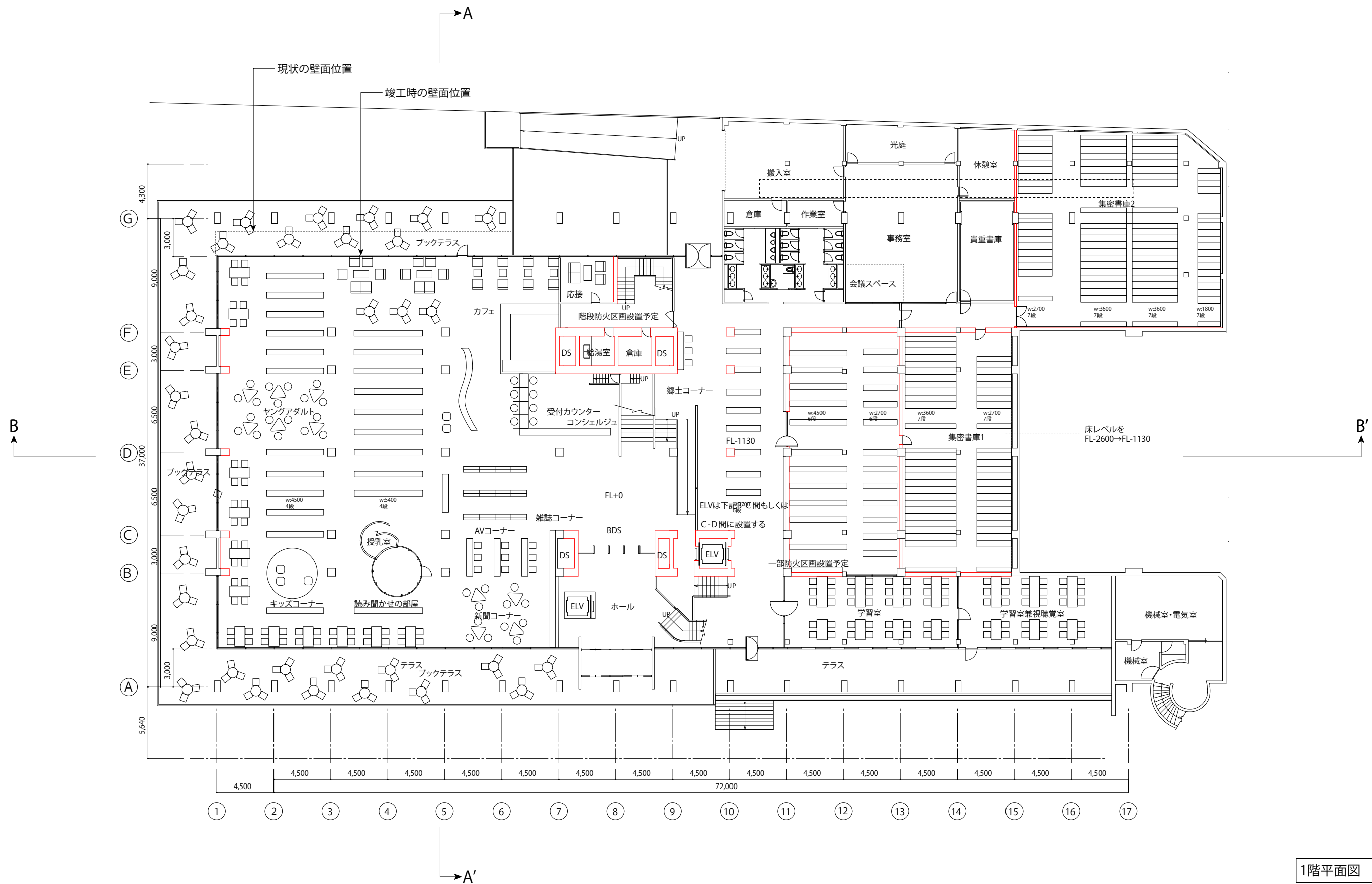
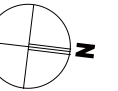
茨城県議事堂を改修し図書館として利用。議場が学習スペースとして活用されている。

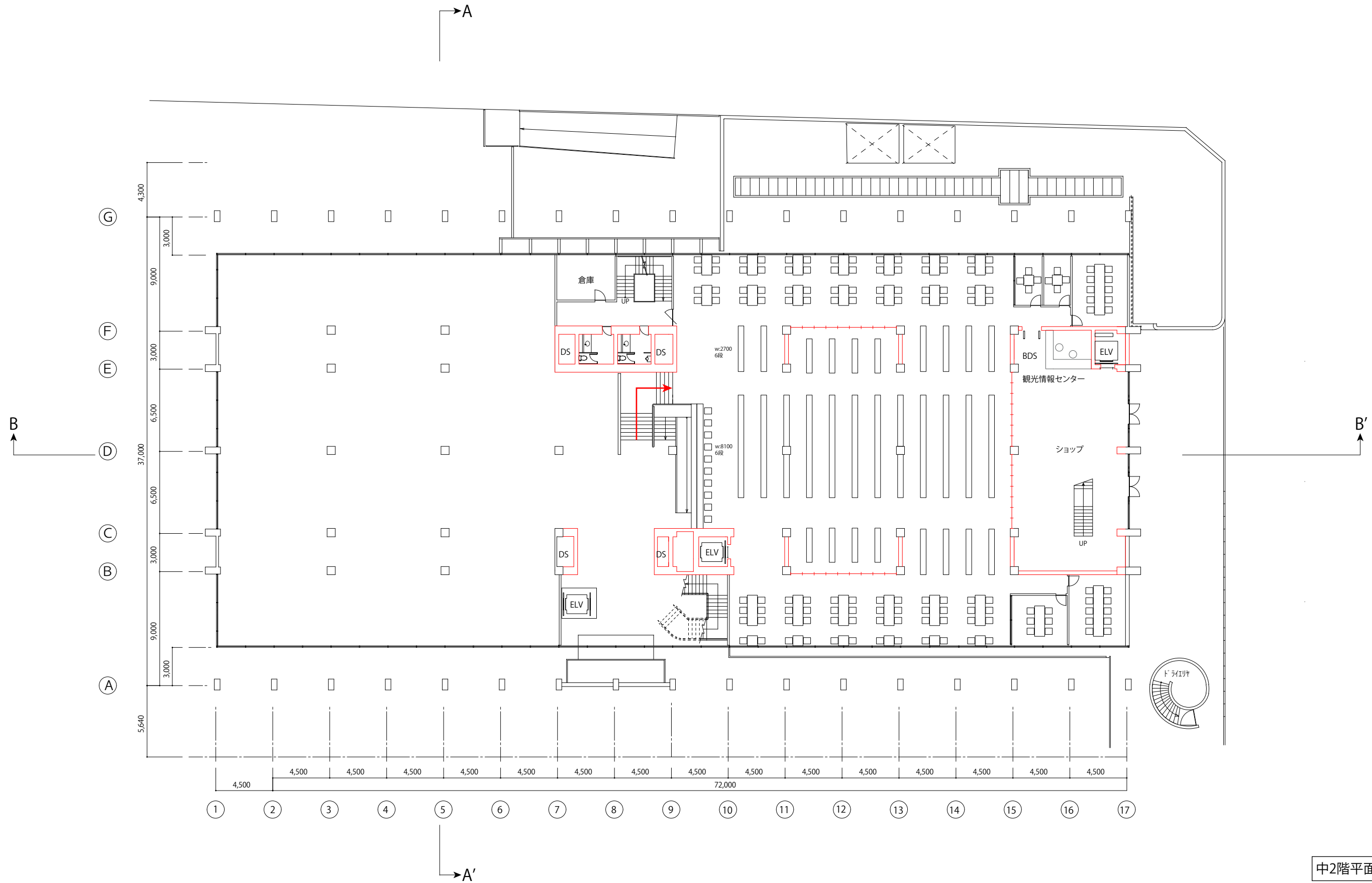
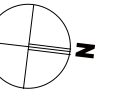


□倉敷市立美術館

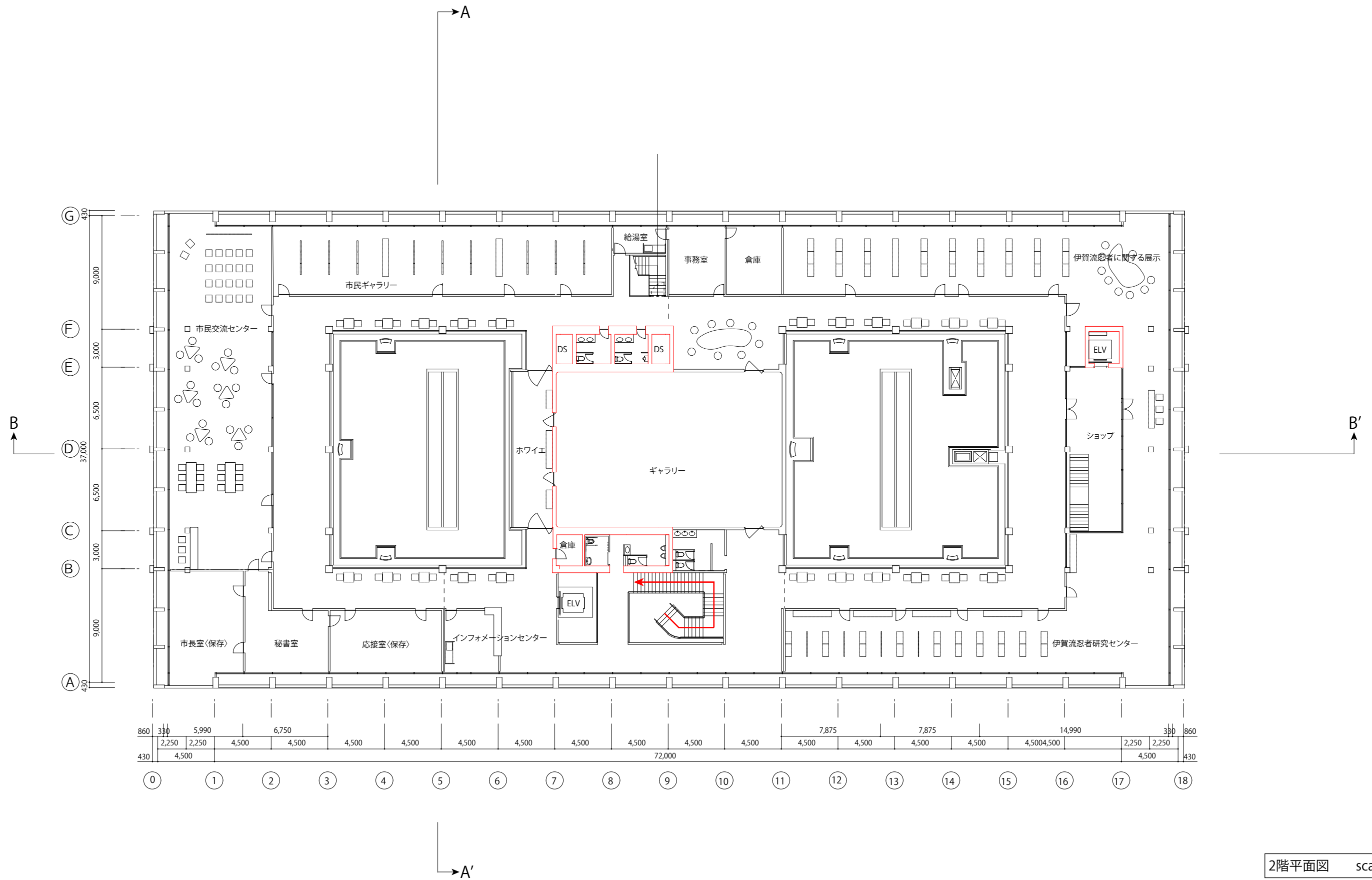
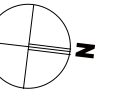
丹下健三設計の市庁舎（1960 年）を美術館に改修（改修設計は浦辺鎮太郎 1983 年）し活用。



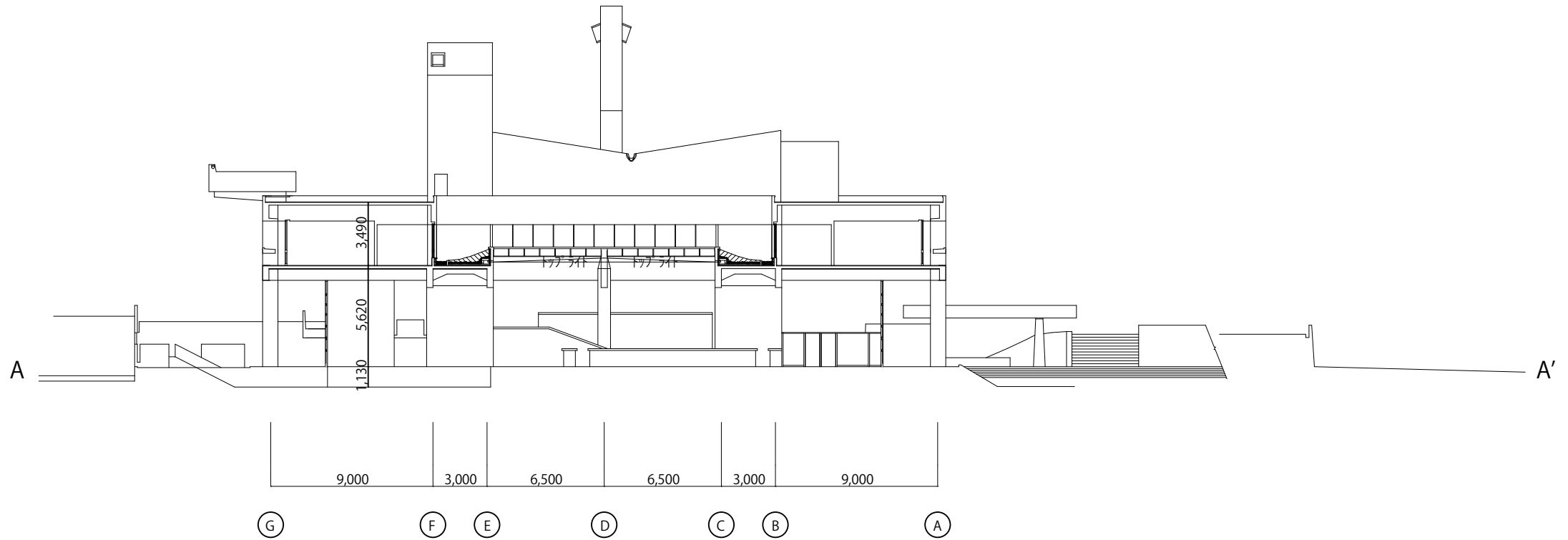
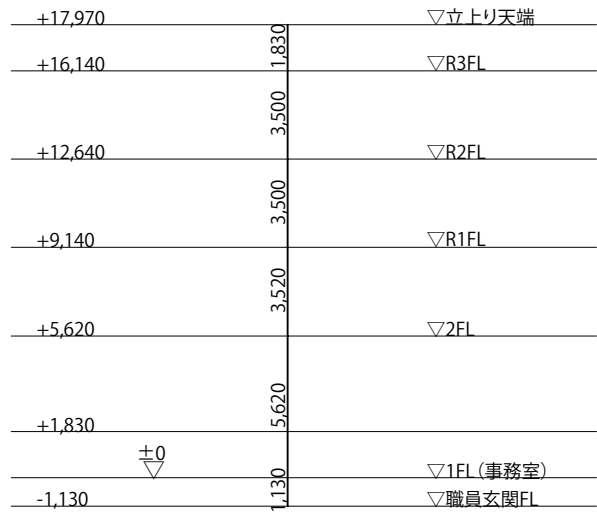




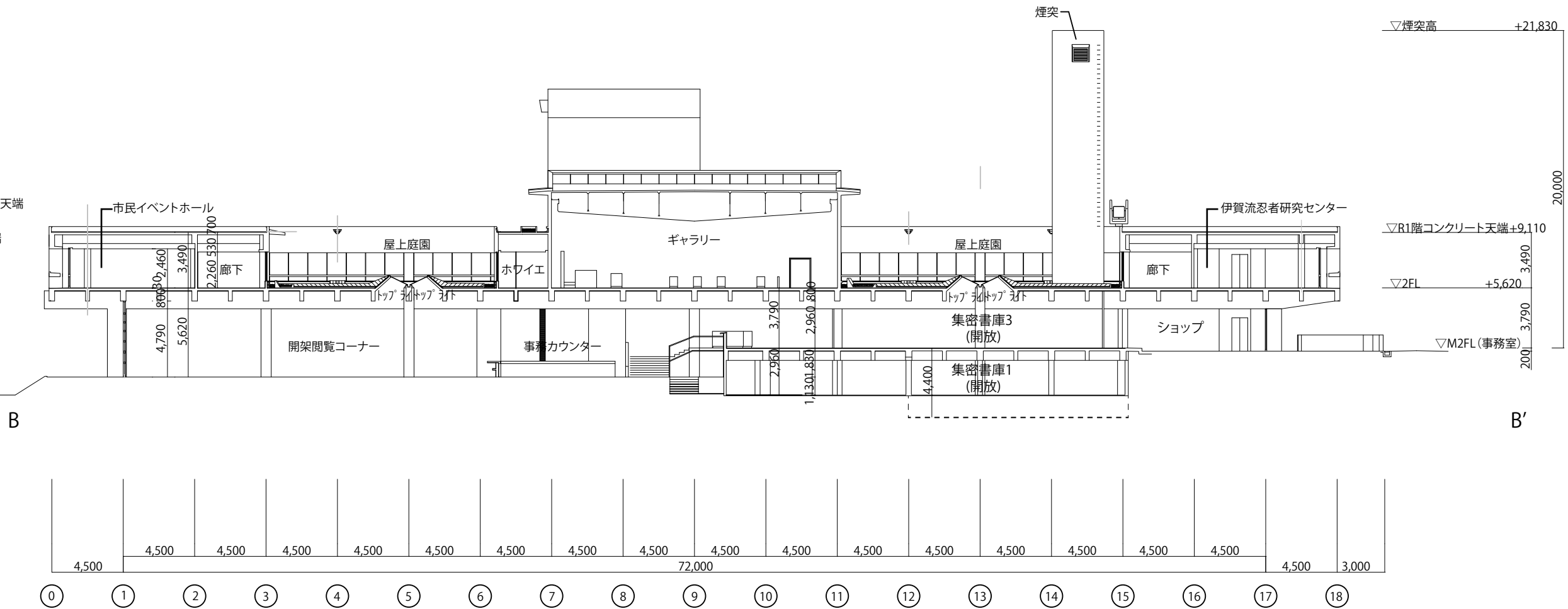
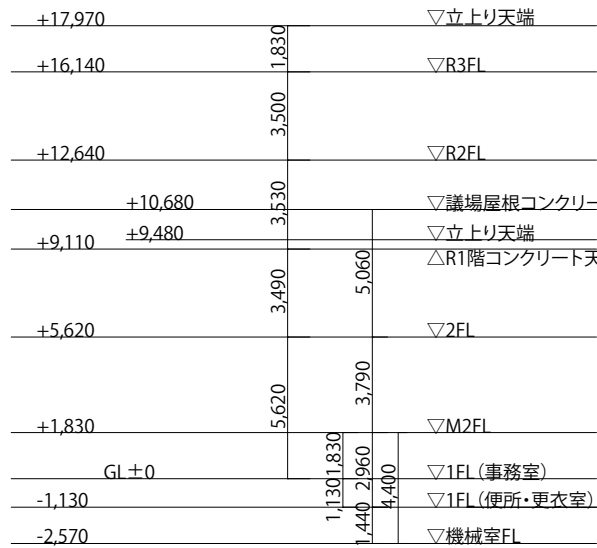
中2階平面図 scale 1:300



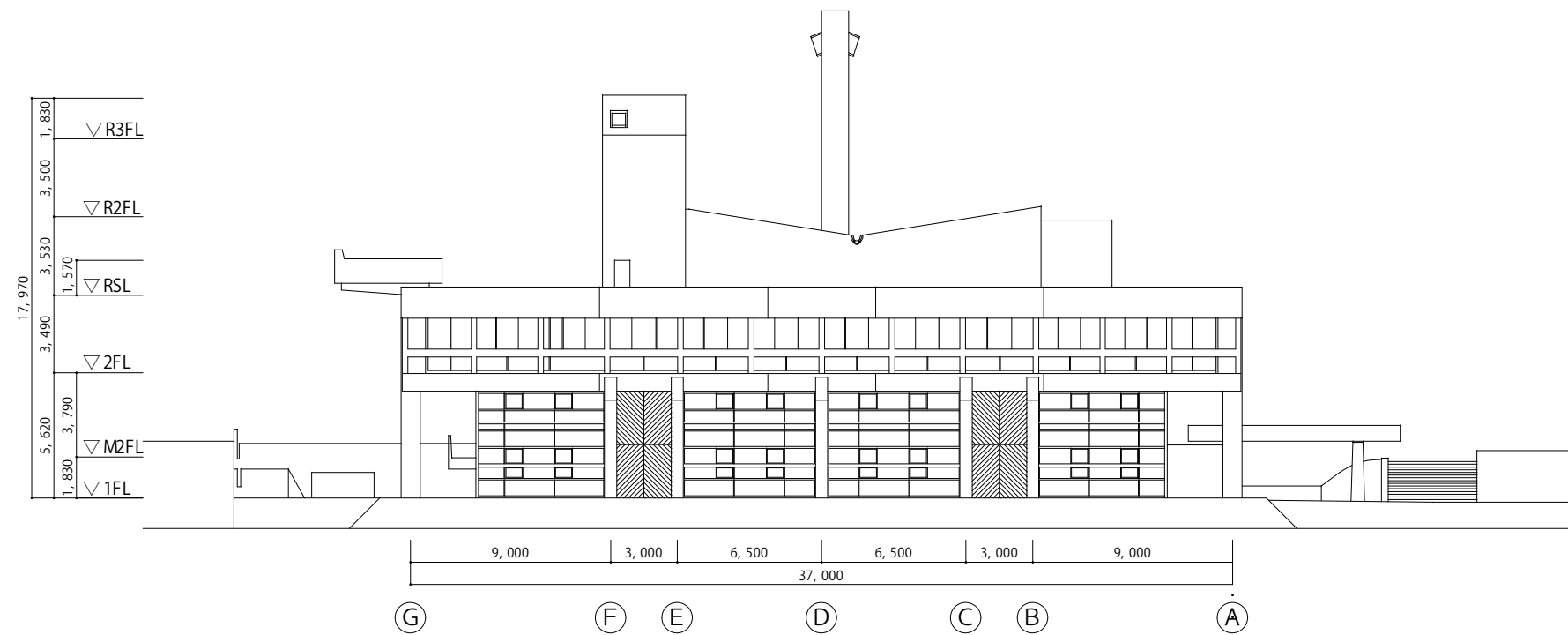
2階平面図 scale 1:300



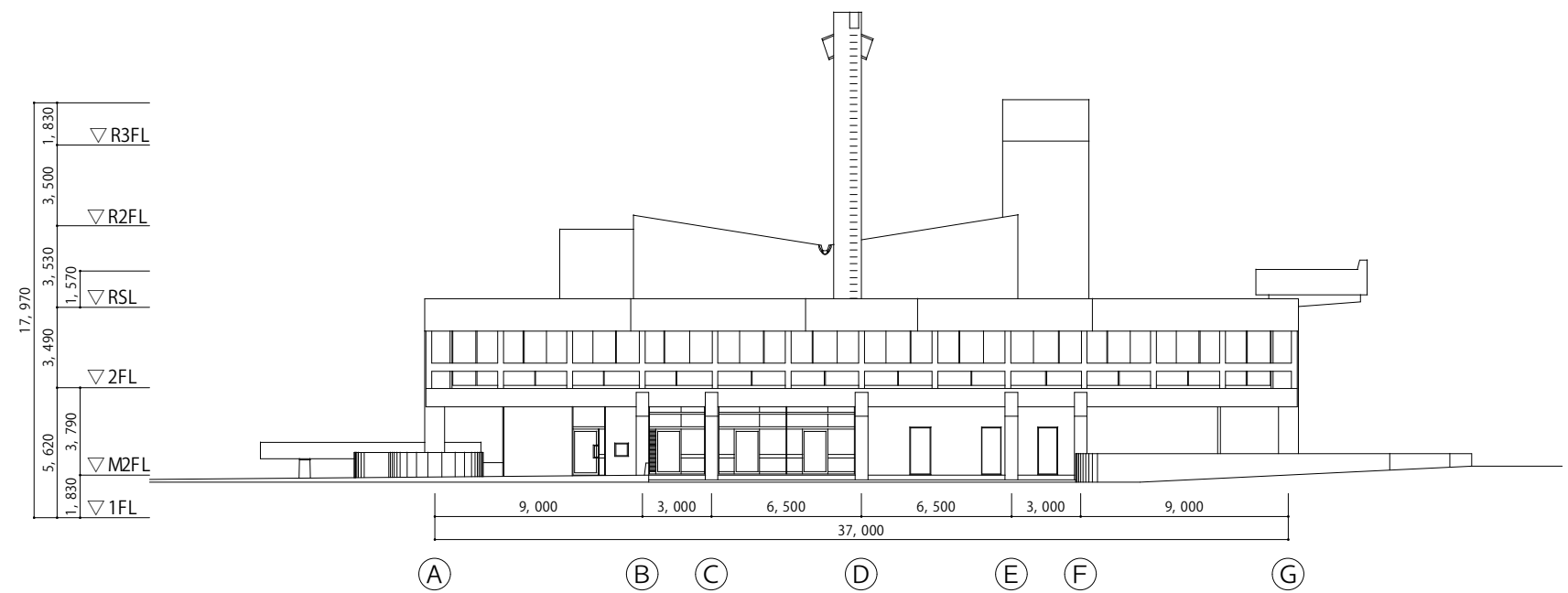
A-A'断面図 scale 1:300



B-B'断面図 scale 1:300



南立面图 scale 1:300



北立面图 scale 1:300